HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロリス=メリコフの改革案とツァーリズム
Author(s)	和田, 春樹; Wada, Haruki
Citation	スラヴ研究, 6, 89-149
Issue Date	1962
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4963
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113171.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ロリス＝メリコフの改革案とツァーリズム

和　田　春　樹

ま　え　が　き

クリミア戦争における敗北によって農奴主国家体制の破産が決定的なものとなった直後から，ツァーリズム権力が破局からの脱出を求めて，転生を試みたのは周知の事実である．以後，行政面でも，経済面でも，さまざまな改革が立案・実施された．その中で，国家の政策決定機構＝政治制度に関しては，その改革の企図が数次にわたって試みられはしたものの，いずれも流産に終っている．これらの一連の企図に終止符が打たれるのはどの時点であろうか．

1882年には内相イグナチエフ Н. П. Игнатьев が3000人の代表を集めるゼムスキー・サボール Земский собор 案を提起している．しかし，「ツァーリの国民 народ との結合」をデモンストレートしようとの意図をもつこの時代錯誤的提案が政治制度政革の企図となしうるかどうかは疑問である[1]．やはりわれわれは，1881年1月28日提出の内相ロリス＝メリコフ М. Т. Лорис-Меликов の改革案が清算され，その公的声明として，同年4月29日，専制護持のマニフェストが出された時に，一連の政治制度改革の企図に終止符の打たれた時点を求めるものである．

とするならば，このロリス＝メリコフの改革企図を対象とし，その準備にはじまって清算に終わる過程を追求することは，以後の時期におけるツァーリズム権力，すなわちロシア資本主義が成立し，帝国主義段階にはいる19世紀80年代から20世紀初頭のロシアの国家権力としてのツァーリズムの性格の分析に一つの重要な資料を提供してくれるであろう．本稿の意図はここにおかれる．

この問題についてはすでに長い研究史がある．しかし，本格的な史料操作に基く研究は1918年のゴリーツィンの論考[2]と1938年のゴーチエの論考[3]の二つを挙げうるにとどまる．ゴリーツィンの論考は彼がはじめて公刊した本件関係の公文書その他14点の史料の解題として書かれたものである．この旧ロシアの名門公爵の論考は一応改革案の準備過程にもふれ，この問題についての唯一のトータルな分析をなしている．しかしながら，改革案の準備過程の分析ははなはだ簡略にすぎる上，およそ政治的なるものへの

(1) См. П. А. Зайончковский, Попытка созыва земского собора и падение министерства Н. П. Игнатьева. «История СССР», 1960, №. 5.

(2) Н. В. Голицын, Конституция графа Лорис-Меликова. Материалы для ее истории. «Былое», 1918, №. 4-5. стр. 125-153.

(3) Ю. В. Готье, Борьба правительственных группировок и манифест 29 апреля 1881 г., «Исторические записки», т. 2, 1938. стр. 240-299.

論者の無理解を露呈しており，きわめて不十分なものである．したがって改革案そのもの分析もすこぶる皮相なものにとどまり，その評価はこの改革案が実現されていればロシア革命も避けられたものをという主観的な願望に彩られている．改革案の清算される過程については，アレクサンドル三世の動揺の理由などの点でむしろゴーチエを抜く分析をみせてはいるものの，史料的にすでに過去のものでしかない．

一方，ゴーチエの研究は「アクサンドル三世の治世の最初の二カ月間における政府部内の党派の抗争過程そのものを復元する」ことを目的としている．したがって，ここでは改革案そのものも，まして改革案の準備過程もまったく対象にはなっていない．対象とする3月1日以後の過程については，ソヴェト時代にはいって多く刊行された本件関係者の日記，書簡類をあらたにふまえ，きわめて細く史料を使っており，この点，ゴリーツィンの水準をはかるかに抜いているが，文字通りの事実の復元，羅列に終始している．そのくせ抗争当事者たちの政治情勢認識についての史料の記述には一顧だにしないのである．ここには歴史的分析が欠如している．

最近のソヴェト史学界では1879～80年のロシアの政治情勢を「第二の革命情勢」と規定し，その中での「上層の危機」の現われとしてロリス＝メリコフの改革企図をとらえるという視角が一般化した[1]．「革命情勢」という規定の当否は別としても，権力の内部で政治制度の改革案が準備され，提案されるという現象を一定の危機的な政治情勢の産物としてとらえ，その審議過程をこの政治情勢の展開によって根本的に規定されるものとする視角は一般的には正しいと思われる．しかしながら，そのような「革命情勢」論の視角からする本格的な史料操作に基く研究がいまだ出ないがためでもあろうか概説にみるロリス＝メリコフの改革企図の取り扱いはきわめて単純かつ機械的な情勢決定論でしかない．

以上みた従来の研究の欠陥はまず第一に改革主唱者としてのロリス＝メリコフの思想と行動の分析が不十分であること，第二に国内の政治情勢のこの改革企図との関係を歴史具体的に解明していないことである．われわれの分析においてはとくにそれらの点に留意したい．

次にわたしの利用する史料の基本的なものを紹介しておきたい．ながらくその保存を疑問視されてきたロリス＝メリコフのアルヒーフが近年文書館で発見された．これを使った本格的な研究はまだソヴェトでも出ていない．したがって，われわれはヘイフェッツによるその全貌の簡単な紹介[2]によるよりほかなかった．かってこのアルヒーフ中にあった改革案関係の基本文書は先に述べたごとくゴリーツィンによって公刊されている[3]．これはロリス＝メリコフのツァーリあての覚書三通，改革の公示文案二通などより

(1) そのはしりは История СССР. т. 2. Россия в XIX веке. Под ред. М. В. Нечкиной. М. 1955. あたらしくは Ш. М. Левин, Общественное движение в России в 60-70-е годы XIX века. М. 1958.

(2) М. И. Хейфец, Архивные материалы М. Т. Лорис-Меликова. (К истории второй революционной ситуации в России) «Исторический архив», 1959, № 1.

(3) Голицын, указ. соч. стр. 154-186. 以下 Материалы と略す。

なっている．次に書簡類では，アレクサンドル三世とロリス＝メリコフの往復書簡[1] ゴーチエは奇妙なことにこの史料を見落している)，宗務院総監 обер-прокурор Синода ポベドノスツェフ К. ф. П. Победоносцев のアルヒーフ中の来信（中で重要なものはアレクサンドル三世からのものである）と彼の書簡の草稿など[2]，ポベドノスツェフのアレクサンドル三世あて書簡[3] が公刊された．この最後のものはゴーチエの引用によることをよぎなくされた．おなじく一部公刊された[4] が，なお未公刊のものが多いポベドノスツェフのチュチェヴァ Е. Ф. Тютчева あて書簡もゴーチエおよびゴリーツィンの引用によった．この書簡はポベドノスツェフの気分，考えを時を追って伝え，日記のないのをカヴァーしてくれる．さてその日記類では，大臣委員会議長 председатель Комитета министров ヴァルーエフ П. А. Валуев[5]，陸軍大臣ミリューチン Д. А. Милютин[6] (ゴーチエはアルヒーフで使っている)，国家評議会秘書官 государственный секретарь ペレトツ Е. А. Перетц[7]，三人の日記が公刊されている．国家評議会議長 председатель Государственного совета コンスタンチン大公の日記[8] は3月8日，9日両日の分のみ公刊されている．この他に第二次的な史料はいくつかあるが，以上が本稿の利用する根本史料である．ロリス＝メリコフのアルヒーフ中の史料の十分にはうかがえない現在，本稿は研究ノートの性格を出るものではない．

第一章　ロリス＝メリコフとツァーリズムの政治家たち

1

1879年4月2日朝，皇帝アレクサンドル二世は，冬宮内の庭園でいつもの朝の散歩をしていたさい．一人の中年の男に狙撃された．5発の銃弾が放たれたが，ことごとく外れた．皇帝は近い戸口へ向って走るさい，つまずいて倒れはしたものの，無事であった．この男はペテルブルク県生まれ，33歳の元小学校教員，ソロヴィヨフ А. К. Соловьев といい，サラトフ県の農村活動をやめてこの目的のために上京した革命家であることが間もなく知られた．死刑を待つ獄中で書いた供述書の中で彼は「われわれ革命的社会主義者は政府に宣戦を布告したのだ」と書き，ツァーリをさして「人民の敵」と呼んだ[9]．

1878年からはじまった革命家のテロルがついにここまできて，1866年4月以来まる13

(1) Переписка Александра III с гр. М. Т. Лорис-Меликовым. (1880-1881 гг.). «Красный архив», 1952, т. 1 (8), стр. 101-131. 以下 Переписка と略す。
(2) К. П. Победоносцев и его корреспонденты. Письма и записки. т. 1. Novum Regnum. 1923. M. 以下 Novum Regnum と略す。
(3) Письма Победоносцева к Александру III. т. 1-2. П.-М. 1925-26.
(4) «Русский архив», 1907, кн. II.
(5) Дневник П. А. Валуева. 1877-1884. Пг. 1919. 以下 Валуев と称す。
(6) Дневник Д. А. Милютина. т. 3. 1878-1880, т. 4. 1881-82. М. 1950. 以下 Милютин と略す。
(7) Дневник Е. А. Перетца (1880-1883). М.-Л. 1927.
(8) К истории Лорис-Меликовой "конституции" (Заседание совета министров 8 марта 1881 г.). II. Из дневника вел. кн. Константина Николаевича. «Красный архив», 1925, т. 1 (8), стр. 151-152.
(9) F. Venturi, Il populismo russo. Torino. 1952. pp. 1022-24.

年間絶えてなかった皇帝暗殺の試みがなされたことはツァーリズム政府を震憾させた．権力者の気分は6月3日リヴァヂアへの逃避行から帰った皇帝を訪れたヴァルーエフの日記に明らかである．

「皇帝は疲れている様子であった。無理に隠そうとしている神経のいら立ちについて自分から話した．……宮殿のまわりは一歩毎に警官が警戒していた。……地面が割れ，建物は崩れ落ちんとするかのように感じられた。……主人たちはぼんやりと災を予感し，内心の不安を隠しているかのようであった。[1]」

ことが単なるテロルにすぎなければ，このような衝撃も不安もそれだけのものであったろう．しかし，そうではなかった．この月同じヴァルーエフが彼の主宰する特別委員会の結論をまとめた報告にそのことは見てとれる．報告はまず前年8月4日の第三課長官 начальник III отделения メゼンツェフ H. B. Мезенцев 殺害事件ののち政府の発した8月9日の声明——これは「ツァーリの忠良なる臣民はその取り得る一切の手段を尽して内なる共同の敵を根絶する政府を支援する」よう呼びかけたものであった[2]——が何の反響もないままであることを指摘した．

「特別な注意を要するのは，比較的少数の危険分子のグループに対する政府の現実の闘争に国民のうち多かれ少かれ教養ある人々のほとんどすべてが明らかに参加していないという事実である．この層の大多数の者は落着かない．彼らは闘争に参加し，政府の味方をすることはせずに，何となく戦闘の結末を待っている．」

「知性の低い大衆」においてはどうか．彼らは革命家を捕えたり，デモを妨害したりする．しかし，この援助は「無秩序で，乱暴で，ほとんど恣意に近く，期待をかけるにはあまりに危険な」ものである．

「このような大衆は，あらたなる物質的な改善や利益が約束されると，危険分子の声，解釈，約束に容易に近づきうるものである．……要するに，国民のすべての階層にある曖昧な不満が見られ，それはすべての人の心をとらえている．誰も彼も何事か不平をいい，変化を待望している[3]．」

人民大衆の生活への不満，知識階層から支配階級の一部にまでおよぶ権力への不信——その中での突撃であるが故に，革命党のテロルは恐るべきものであった．

「皇帝は明らかに未来のために何事かをなさずにはすまされないということを意識している[4]」とヴァルーエフは6月8日の日記に書いている．

しかしながら事態を打開するような対策は若干提起はされたものの，実現に至らなかった．この年12月17日にヴァルーエフが再提出した彼の1863年4月の国家評議会 Государственный совет 改造案，年が明けてから再提出されたコンスタンチン大公の1866年の同じく国家評議会改造案はいずれも1月30日に却下されたのである．

ヴァルーエフの案は形式上の最高立法機関である国家評議会に県ゼムストヴォの代表を各県2～3名，他に大都市の代表を加え，議題を限定して審議に参加させるという内容のものであった[5]．コンスタンチンの案は原文が残っていず，不明確であるが，県ゼ

(1) Валуев, стр. 38.
(2) Venturi, op. cit., p. 1000.
(3) ibid., p. 1026.
(4) Валуев, стр. 38.
(5) П. Щеголев, Из истории «конституционных» веяний в 1879-1881 гг. «Былое», 1906,

ムストヴォ代表の数を1名づつとするなどヴァルーエフ案より狭いものであった[1].

これらの案がこの時却下されたのは必ずしも皇帝の意志の問題だけではない．たしかに皇帝アレクサンドル二世は政治制度の改革を望まなかった．1862年6月ヴァルーエフが国家評議会を改造して，「国の代議制度のごときもの что-то вроде представительства страны」をつくるという構想[2]を説明した時，彼の示した反能は，この点に関するかぎり一貫した彼の考えを表わしているように思われる．

「自分は憲法の確立に反対する．それは自らの権威を惜しむからではなく，これがロシアの不幸をもたらし，ロシアを解体に至らしめると信ずるからである[3].」

しかし，いかに皇帝が国家基本法第1条に「専制的 самодержавный かつ無制限の君主[4]」と規定される専制君主であるといっても，その意志から政策までの間には官僚政治家たちが介在する．ウェーバーがいうように，「官僚制的専門知識」に対して君主は「無力」である．それに性格的にいっても，この皇帝には神経の弱い，「女性的なところ」があった．ほぼこの皇帝の全治世にわたって陸軍大臣であったミリューチンの観察によれば，この「皇帝は自分の権力への執着に無縁ではなかったが」，彼には「性格と信念が強固でないという別の一面」があり，彼の「行動様式」を説明するのは後者の面であった[5].

では1881年1月の事情はどうであったのか．1月21日から皇帝，皇太子，コンスタンチン大公，ヴァルーエフの他，内相マーコフ A. C. Маков，第三課長官ドレンテリン A. P. Дрентельн，国家評議会法律部会議長 председатель департамента права Госуд. совета ウルーソフ公爵 C. H. Урусов の7名が参加して行なわれた両案の審議では仲の悪いコンスタンチンとヴァルーエフが互いに相手の案をけなし合い，皇太子以下の4名は反対した．かくして皇帝が何らの意志表示をするまでもなく，この両案は却下されることになったのである[6].

1月27日ヴァーエフは日記に次のように書いた．

「思いがけない，しかも不可避的な危機的な事件がおこらないと，現在の衝撃よりももっと強力な衝撃がないと，現在の窮乏よりさらに極限的な窮乏がやってこないと，活路は開けないのではないか—そういう意識に私の心は重い[7].」

改革者としては失格であることを暴露したばかりのこの官僚もその情勢観察は相変らず鋭いというべきであろう．

月が変って二月．ヴァルーエフの陰気な予言が適中する．

XII, стр. 262-263. 1863年4月の事情については См. Дневник П. А. Валуева министра внутренних Дел. т. 1. 1861-1864 гг. М. 1961. стр. 217-219. なお官制については См. Н. П. Ерошкин, Очерки истории государственных учреждений дореволюционной России. М. 1960.

(1) Щеголев, указ. соч. стр. 263, 271-274. Валуев, стр. 48.

(2) この言葉は彼の6月26日付第三課長官あての覚書に見られる。この覚書は以下に所収。«Исторический архив», 1958, № 1. стр. 141-144.

(3) Дневник П. А. Валуева. т. 1., стр. 181. ガルミーザはその著書の中でこれを誤って紹介している．В. В. Гармиза, Подготовка земской реформы 1864 года. М. 1957. стр. 161.

(4) С. В. Юшиков, История государства и права СССР.ч. 1. М. 1946. стр. 228.

(5) Милютин, т.4. стр. 93

(6) 審議の模様は См. Валуев, стр. 47-55.

(7) Там же, стр. 54.

2月5日午後6時20分皇帝の居住する冬宮の地下室に仕掛けられたダイナマイトが爆発した．真上の中央衛兵詰所は破壊され，衛兵中死者9名，負傷者40名を出した．二階上の食堂では床が持ち上り，壁に割れ目ができ，食器が砕けた．全階の窓ガラスは割れ，ガス燈は消えた．一瞬の爆音と闇の中で，皇帝は別室にてこの日の招宴の主賓，皇后の兄ヘッセン公アレキサンダーと向きあっていた[1]．

この事件の与えた印象は深刻なものであった．相つぐツァーリ暗殺の企ての与える心理的衝撃はここにおいてその極に達したかの感があった．まことにロリス＝メリコフの同年4月12日の報告にいわれるように，「ロシア大地のツァーリ，九千万臣民の命令者は自らの家においてなおその身の安全なることを確信できない[2]」のである．

2月8日皇帝は皇太子と5名の大臣を招き，事態を協議した．大臣たちは些末な警備措置を提案するばかりであった[3]．ただ一人明確な提案を行なったのは皇太子で，彼は全ロシアにおよぶ独裁的な権限をもつ最高審問委員会 Верховная следственная комисися を創設することを提案した．ヴァルーエフは，これは「実質的には第三課と憲兵司令部 шеф жандармов ばかりでなく，一般に現在政治問題を扱っている他のすべての官庁の廃止に等しい」「ありうべからざる」提案だと評しているが[4]，まさにその故にこの提案は一定の有効性をもっていた．大臣たちは制度的には個別的に，単独で皇帝に責任を有するのみで，治安関係各省機関の活動は統一を欠いていたからである．しかし，皇帝以下出席者全員はこの案に反対し，この日の会議は何らの決定をみぬままに終った．

しかし，夜のうちに皇帝の意見は変った．彼はそのような機関を設置することを決意した．その長官に彼が選んだのは，露土戦争のさいカルス要塞攻略戦を勝利に導いたカフカース方面軍司令官で，臨時県軍政長官 временный генерал-губернатор 中唯一人管内の治安回復に成功を収め，6日前のこの月2日に穏健分子を「慰撫」して，革命党と闘うという明確な戦術を彼に提起していた中央政界の新人ロリス＝メリコフ伯爵であった[5]．翌日皇帝は大臣たちにその意志を伝えた．

2月12日「国家秩序と公共治安維持のための最高管理委員会 Верховная распорядительная комиссия по охранении государственного порядка и общественного спокойствия」設置の勅令が発せられた[6]．長官に就任したロリス＝メリコフは2月14日ペテルブルク住民への宣言を発表し，その中で，革命家の根絶をはかると同時に「公衆 общество の穏健な部分の合法的な利益を庇護する」，「公衆の支持は……国家生活の正しい進行の再建に向って権力に協力しうる重要な力であると考える」と訴えた[7]．

ロリス＝メリコフの登場にいたる過程のツァーリ政府の現状認識と政府部内の状況は以上のようなものであった．国内の政治情勢の与えた危機感が異例な権能を有する機関

(1) Милютин, т. 3. стр. 211-212.
(2) Материалы. № 1, стр. 154.
(3) Милютин, т. 3., стр. 215.
(4) Валуев, стр. 59.
(5) А. Корнилов, Курс истории России XIX века. ч. III. М. 1914. стр. 224. Хейфец, указ. соч. стр. 195.
(6) 8日から12日までの経過は См. Валуев, стр. 59-63. Милютин, т. 3. стр. 214-216.
(7) Корнилов, указ. соч. стр. 224.

の設置とその長官のこれまた異例の人事をまねいたのである．では，一体，このロリス＝メリコフとはいかなる人物であろうか．

2

ミハイル・タリエロヴィッチ・ロリス＝メリコフの人物と思想をうかがうことは，彼が日記も，回想記も残さないだけに極めて困難である．ここで与えられる史料は彼の前半生の事実と晩年の書簡のいくつかと同時代人の評価である．前半生の事実は別としても，他はことごとく厳しい批判的利用を要するものであり，また断片的でもあるので，われわれのここでの分析は多分に仮説的なものたらざるをえず，本節以後に分析される1880年より81年にかけての彼の行動の中で確証されねばならない．

ヴェントゥーリの名著「ロシアの人民主義」の口絵にのせられているこの伯爵の軍服姿の肖像を見ると，鼻の下から頬にかけての大きな髭に，鼻筋が通って，眼光炯炯とした堂々たる風貌であるが，どこかしら東洋の大官という趣きがないでもない．そのはずで，この伯爵将軍はアルメニア貴族の出身である[1]．彼の一族の家系譜の第1ページはすでにその姓に明らかである．ロリス＝メリコフ Лорис-Меликов——ロリ Лори のメリーク мелик（大守）．チフリスとエリヴァンを結ぶ線のちようど中間にある町ロリの16世紀以来の大守，ロリのナザールとダーイ Назар и Дай Лорийские は1602年ペルシア王アッバスにその古い権利を認める勅許状をもらい，イスラムに改宗した．その後キリスト教に改宗したこの一族の領地，ロリ地方はグルジア王国の版図に入り，一族はグルジア王国の上層貴族となった．19世紀初めグルジアはロシアに併合される．この一族にとって三度臣従すべき主君が変ったのである．

ダーイの系統を引くロリス＝メリコフの生家がいつごろからチフリスで商業活動をはじめたのかは知られていない．しかし，カフカース商人によるヨーロッパとイラン，トルコとの仲継貿易の開花をもたらしたのはザカフカースに存在した古い内国関税を廃し，仲継商品に無関税移送を認めた1821年の勅令であった．チフリスの商人がライプツィッヒの定期市にはじめて姿を現わしたのは1824年のことであるが[2]，未来の最高管理委員会長官はその翌年ライプツィッヒとの貿易のパイオニアの一人であるロリス＝メリコフ一族の商人の家に生まれた．彼が6歳の1831年，イラン市場への侵入を目ざすロシアの綿業商人の圧力で特恵的な1821年関税は廃された．シャミーリの反乱などによる政治的配慮からツァーリ政府の方針の転換する40年代まで，アルメニア商人の苦難の時代がくる．この時代はまた旧来の領主の勢力を弱め，政治的にも経済的にもザカフカースの植民地化を計る政策が用いられた[3]．

商人としてのロリス＝メリコフ家に打撃を与えたと思われるこの政策が植民地旧上層支配者としてのロリス＝メリコフ一族を大ロシア帝国の貴族として認可した．これは

（1） 彼の経歴については特に注記のないかぎり以下による。Энциклопедический словарь. «Брогауз-Ефрон». т. XVIII. Спб. 1896. стр. 16-18. Лорис-Меликов М. Т. и Лорис-Меликовы.
（2） М. К. Рожкова, Экономическая политика царского правительства на Средней Востоке во второй четверти XIX века и русская буржуазия. М. 1949. стр. 51-52.
（3） Там же, стр. 93, 100-104.

1832年のことである．このような時代の変化とその中での一家の位置が物心ついていく若きミハイルにいかなる印象を与えたかは知りうべくもない．しかし，彼がラザレフ東方語学院から転じて近衛士官学校入りをしたあたりに植民地の旧支配者，貿易商人，そして俄仕立のロシア帝国貴族の息子としての一つの選択を見ることができるように思う．

このペテルブルク時代，当時無名の貧乏学生であったネクラーソフ H. A. Некрасов と彼は知り合い，数カ月間一つ下宿に同居した．後年，民衆の「涙と復讐の歌い手」として大をなすこの詩人の精神はこの時赤貧の中で形成期を経つつあった．4歳年上で，20歳を出たばかりのネクラーソフとの交友はいまだ十代のこのアルメニア人青年に何ものかを与えたのだろうか．43年，彼は近衛グロドノ驃騎兵連隊に入隊，4年後カフカースに転出した．その時から1875年まで，ロシアにとって歴史が大きく変った約30年間，22の年から50歳まで，彼の半生は途切れることなく，故郷のカフカースで大ロシア帝国軍人として，行政官として送られた．クリミア戦争後の新時代にようやく出世コースにのった彼は1863年，38歳でカバルダのテール地区長官 начальник Терской области の要職につき，以後約10年間この地方の農奴解放，司法行政面の改革を指導した．帝政期の史家はこの時期の彼の行政の啓蒙的性格をいう．ソヴェトの史家も彼がこの地方の社会的・政治的事情をよく研究し，それをたくみに行政に生かしたことを認めている[1]．

そして露土戦争．退官して国外の保養地にいた彼は76年電報で呼びもどされ，カフカース方面軍司令官に任ぜられた．今日のソヴェトの軍事史家はこの戦争におけるロリス＝メリコフについて．「彼は兵法よりも軍隊の人員を頼りにすることに慣れていた」ときわめて低い点数を与えている[2]．その当否はここでは問うところではない．

注目しなければならないのは彼の晩年の書簡に述べられた戦時の経験についての回想である．パンフレット『ロリス＝メリコフの憲法』に抜萃引用されている医師ベロゴローヴイ H. A. Белогоровый あての書簡[3]の中で，彼は「アジアの戦場でおこった無秩序と混乱」の原因を「皇族たちと彼らを取巻いて離れぬ好臣の一派 сволочи-камарилья とが決して罰を受けることはないということ」に求めている．カフカース方面軍最高司令官カフカース総督ミハイル大公の無能ぶり，その責任回避．大公の副官スヴャトポルク＝ミルスキー Святополк-Мирский の仕掛ける「陰謀と嫉妬のやむことなき苦しい期間」．今日までこの戦争について公然と語れないのは．これを皇族の一人が指導したためであり，「わが国に存在する野蛮な風習によって皇族を公然と非難することは crime de Tèse Majesté（大逆罪）とみなされるためであろう」——こう彼は述べている．

ロリス＝メリコフが，大公の取巻連にとってはこの戦争はトルコ人との戦争ではなく，ロリス＝メリコフとの戦争であったといい，作戦指導の困難の原因を彼らの妨害と大公の無能による指揮系統の混乱に求める時，そこに一定の自己弁護があることは否めないとしても，この書簡の意義はそれだけのものではない．なぜならば，ロリス＝メリコフに辛い点をつけた先の軍事史家はミハイル大公を「司令官としての能力はゼロであ

（1） Хейфец, указ. соч., стр. 195. また См. История Кабарды. М. 1957. стр. 118-132.
（2） Н. И. Беляев, Русско-Турецкая война 1877-78 гг. М. 1956. стр. 177.
（3） 1886年10月20日付の書簡である。Конституция графа Лорис-Меликова и его частные письма. Спб.-Лоднон, б. г. [1906], стр. 4-19.

る」と評し，その副官ミルスキーを「軍事面では完全に無能だ」と評しているからである[1]．ロリス＝メリコフの批判には現実的な根拠があり，したがって彼のこの言葉には真実を認めうる．

戦後，功によりロリス＝メリコフは伯爵位を授けられた．それからアストラハン県に発生したペスト退治に一役買わされ，ソロヴィヨフの皇帝狙撃事件ののち，新たに設置されたハリコフの先の職に任ぜられたのである．

ロリス＝メリコフの前半生はこのようなものであった．以下，われわれは彼の思想と人物について，四つの点に限って論じることにしたい．

第一の問題は先に近衛士官学校入りをした若きミハイルの選択といった時のその選択の意味である．晩年の書簡で彼は次のように書いている．

「哀れな祖国，いつの日にかロシア人も他の諸国民に倣って自らの意見と信条を公然と，自由に表明し……そしてそのために正札つきの革命家，国家原理の破壊者の数に入れられないですむ時……がくるのだろうか[2]．」

詠嘆の内容はここではどうでもよい．彼にとっての祖国とはロシアであり，彼がロシア人 русский をもって認じるところが大事なのである．ではその彼のロシアとはいかなるロシアか．いま一つ書簡を引こう．1881 年 10 月 14 日付の内務省経済部次長スカリコフスキー A. A. Скальковский あての書簡の一節である．そこで彼は「モスクワの旧時を愛するアクサーコフ一派の空想的な夢」としてゼムスキー・サボール復活の思想を斥けていう．

「ロシア帝国の住民の圧倒的大多数――ポーランド，バルト海沿岸諸県，西部全域，カフカース，小ロシア，ヴォルガ沿岸の一部，カザックの地それにシベリアも入れたこれら地域の住民はモスクワ大公国 велико-княжество Московское の旗のもとに立つことを望んでいない，なぜならモスクワの民も含めて，彼らすべてにとってはただ一つ全ロシア帝国 Всероссийская Империя の統一の旗があるのみで，ツァーリ権力の執行者が誠実に，巧みに，友交的に仕事に掛かれば，すべての人々が兄弟のようにその下に結集するからだ[3]．」

全ロシア帝国――これが彼のロシアであった．このようなロシアを祖国として選んだことがアルメニア貴族の子の選択の内容なのである．この全ロシア帝国意識は彼の政治思想の要をなすものではないか．

第二の問題は彼における貴族主義の欠如である．彼は死後 12000 デシャチナの土地を子供に遺した大地主であった[4]．しかし，彼には大ロシアの地主貴族のもつ特徴的な生活スタイルとは無縁であったようだ．81 年 4 月に社交界に出はじめた彼の娘たちに彼の妻がいった次の言葉にそのことがうかがえる．「もったいぶるのは沢山よ．ただの辻馬車に乗ってたのはそんなに昔のことではないでしょう．おそらく，じきにまた辻馬車に乗るようになるのよ[5]．」この妻は「社交界婦人ではなく，飾り気のない，しかも賢い婦人」であったと評されている．おそらくこの点では彼はアルメニア人の貿易商人の子

(1) Беляев, указ. соч. стр. 89.
(2) Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 4.
(3) Исповедь графа Лорис-Меликова. «Каторга и ссылка», 1925, № 2 (15), стр. 120.
(4) Хейфец, указ. соч. стр. 203.
(5) Перетц, стр. 61.

であり続けたのではないか．ネクラーソフとの交友も，また晩年のシチェドリーンとの交渉[1]も，彼の一定の「平民性」を示しているように思われる．彼には由緒正しき名門貴族の特権を保護するというような貴族主義的な政策モチーフは欠如していたのであろう．

第三の問題は彼の自由主義である．帝政期の史家は彼を自由主義者とよんだ．例えばコルニーロフはいう．「ゼムストヴォおよび一般的にリベラルな気分の人々の正当な要求を満足させようとした心の底から自由主義的なまったく誠実な人[2]．」

問題は彼の自由主義の質にある．すなわち彼がどの程度の自由主義者であったかということである．まず手掛かりとして，晩年国外で彼と親しく交わり，多くの文をやりとりした医師ベロゴローヴイが彼の死んだ翌年国内の雑誌に発表した回想の一節を引く．

「穏健な漸進主義者，首尾一貫したリベラル，諸民族のノーマルな成長と正しい発展を妨げる一切の現象に対しては，それがどういう面に現われるにせよ，ひとしく不同意を示した確信をもった有機的進歩の擁護者。人類の進歩を信じ，ロシアがそのために貢献することが必要だという不動の確信をもっていた彼は国民教育をできるだけひろく普及させること，学問を拘束しないこと，自治を拡大し，より大きな自立性を与えること，諮問的なメンバーとして立法問題の審議に公衆から選出された代表者を加えることを主張した。彼の改革思想はこれ以上には出なかった[3]．」（強調—和田）

あえて最後の一節を強調したのは筆者の意を汲んだつもりである．彼のいい方は「これほど急進的な自由主義者」というのではなく，「これほど穏健な自由主義者」というものである．およそ穏健が美徳であり，急進が悪徳である80年代末のロシアで発表されたこの文章の意図がロリス＝メリコフを弁護しようというところにあることは明らかである，何に対してか．ロリス＝メリコフは「憲法党の党首[4]」であるという政界内の評判に対してである．とすれば，ここにはロリス＝メリコフの自由主義の若干の歪小化がみられるのではないか．

ベロゴローヴイは皇族批判のこめられたロリス＝メリコフの露土戦争についての手紙を受け取った人であった．それればかりではない．彼はロリス＝メリコフからの書簡の中にアレクサンドル二世は「ロシアをまったく愛していなかった」という一節があったのも，アクレサンドル三世がフォンヴィージンの「親がかり」に出てくるあの金持貴族の愚鈍な息子，「ミトロファーヌシカ」の名で呼ばれていたのも，それから彼を取巻く宮廷勢力が「勝ち誇った豚ども」と罵られていたのも読んでいたはずである[5]．かりにペレトツを信ずれば，81年4月下野したロリス＝メリコフは82年に就職運動をしている[6]．その失敗で決定的になった失寵せる官僚のルサンチマンの現われにすぎないとこれらの言葉を片づけてよいであろうか．

（1） Хейфец, указ. соч. стр. 202-203.
（2） Корнилов, указ. соч. стр. 225.
（3） Н. А. Белогоровый, Граф М. Т. Лорис-Меликов. «Русская старина», 1889, № 9. цит. в Энциклопедический словарь. «Броггауз-Ефрон». Лорис-Меликов М. Т.
（4） Исповедь графа Лорис-Меликова. стр. 119. ヴィッテがロリスを「西欧流の立憲主義者」とよぶのは政界内の評判によるものであろう。Витте, Воспоминанията. 2. М. 1960. стр. 34.
（5） Хейфец, указ. соч. стр. 202.
（6） Перетц, стр. 131-134, 140.

先にわたしは露土戦争の件での大公批判に一定の真実を認めた．大公の戦争指導を批判することから，大公の兄弟か甥に当る皇帝の国政指導を批判することまでの間には飛躍を要する懸隔はない．とすれば，上記の彼の言葉は思想のレヴェルでとらえてよいと思う．おそらく臣従すべき主人を機を見て取り代えてきたロリの町の大守の末裔にはツァーリに対する宗教的な忠誠心などはなかったのであろう．

81年夏彼はシェスタコフ Шестаков に向って「ロマノフ家の一族は一文の値打もないが，ロシアには必要だ[1]」と語った．このロシアとは彼の「全ロシア帝国」のことではないか．全ロシア帝国にとってロマノフ一族が必要だというのは何故か．当然この帝国統合の象徴としてであろう．しかし，この一族は無能であり，愚鈍であり，一文の値打もない．とすれば，そういう皇帝や大公たちから政治の実権を奪うという志向が出てくるのは当然だろう．われわれは一連のロリスの言葉に皇帝を全ロシア帝国統合の象徴に棚上げして，非政治化するという志向を読みとれるように思う．

一方で，ベロゴローヴイによれば，彼は地方自治の拡大と「公衆」の立法への諮問的参与を考えているという．皇帝の非政治化が公衆の政治参与と結びついてくる時，その行きつくところは「似而非」という字が上につこうとも，一定の立憲制であることは明らかだろう．ロリス＝メリコフはそのことを意識していただろうか．

先に引いたスカリコフスキーあての書簡の中で彼は立憲制を「ロシアにとってかくも不適当な」ものとよんでいる[2]．この書簡が「憲法党の党首」たることへの彼自身の弁明の書簡であることを思うと，そのかぎりで，われわれはこれを信用することはできない．彼が立憲制をどう考えたかはここでは結論を下さないでおくことにしよう．

第四の問題は彼の行動様式の問題である．

ロリス＝メリコフは人の影響を受けやすく，場当り的な政策をとったかのごとくにいう論者がいる．ゴリーツィン公爵である．彼はロリス＝メリコフの政策の特徴を「その時点の提起する諸要求を疑いもなく鋭敏にとらえてはいるものの，十分に考えぬかれておらず，軽いこと легковесность」に求めた[3]．

またロリス＝メリコフは明確な路線をもたずに動揺していたかのごとくいう人もいる．例えばヴィッテ С. Ю. Витте は1901年に皇帝に提出した覚書の中で，「ロリス＝メリコフ伯はさながら問題を単的にみることを恐れるかのごとく，自分のプログラムを明確にするのをはばかった[4]」と述べている．

しかし，同じヴィッテの回想録には彼が西南鉄道支配人時代の1880年当時ロリス＝メリコフの口から聞いた次の言葉が書かれている．

「君はわたしにやれ，やれという。君はおしゃべりばかりですむかもしれないが，わたしはタクトを頭に入れておかなければならない．もしもわたしがタクトを頭に入れておかなければ，わたしは皇帝に追い出されてしまう[5]．」

（1） Хейфец, указ. соч. стр. 202.
（2） Исповедь графа Лорис-Меликова. стр. 120.
（3） Голицын, указ. соч. стр. 130.
（4） Самодержавие и земство. Записка б. министра финансов статс-секретариата Гр. С. Ю. Витте. Спб. 1908. стр. 117.
（5） С. Ю. Витте, указ. соч. т. 1. М. 1960. стр. 158.

タクトとは，ウシャコフによれば，「人との正しい関係を示唆する限度の感覚」である．

そしてさらにロリス＝メリコフ自身の83年12月1日付のヴォルコンスキー伯 Г. Волконский あての書簡の中に次の一句が見出される．

「人間がいわば自分の良心を売りに出して，誠実という基本理念を押し殺して，すべてに満足しているふりをして，多くの場合心にあることとはまたく別のことをいう決心がなければ，いかなる努力もそこでは望む結果を挙げえないあの腐ったペテルブルクの世界[1]」（強調—和田）

感傷的な調子を信用しようとしまいとそれは人の自由であるが，ここにロリス＝メリコフのとる行動様式の謎解きがなされているとわれわれは考える．

曖昧とみえるもの，不明確とみえるもの，場当り的とみえるもの——そこにはロリス＝メリコフの戦術があったのではなかろうか．露土戦争当時の「きわめて狡猾な敵」ミルスキーに彼は “esprit d' intrigue” を認めている[2]．ということは，このミルスキーこそ彼にその “esprit d' intrigue” を伝授し，彼のツァーリズム政治家としての行動様式を磨いてくれた師ではなかったのか．

ロリス＝メリコフの人物と思想についてわれわれは以上のような想定を行なう．それは以下の行論で確証されるであろう．

3

先にも述べた通り，ロリス＝メリコフは中央政界の新人であった．おそらく政府部内には彼は何らのコネクションももたなかったに違いない．当面彼には皇帝の信任があるだけであった．自らの政策を実現し，何らかの改革を行なおうと真剣に考える政治家なら，当然政府部内における自らの支持を強めることも考えるだろう．彼はどうしたか．

皇帝の白羽の矢が立った2月8日の夜，彼は大臣委員会議長ヴァルーエフを訪問している．この60の坂を越えた老官僚の鋭い情勢評価の感覚を示す言葉はすでに幾度か引用した．彼が国家評議会改造案の提唱者であることもわれわれは知っている．ロリス＝メリコフはこの彼に支持を求めたのだろうか．そうではない．この訪問は著しく儀礼的なものであった[3]．

ツァーリの官僚として仕えること久しい名門貴族の出で，プーシキンに「大尉の娘」の主人公グリニョフのモデルとされ，30年代にはレールモントフと同じフロンド貴族青年のサークルに属し，フランス語とラテン語をよくするインテリの目をしたこの貴族主義者[4]とロリス＝メリコフとではまず肌合からしても合わなかった．まして，ヴァルーエフの貴族主義は肌合だけの問題ではなく，彼の政策の基本的モチーフである．

64年に書いたノートの中でヴァルーエフは国家の柱石は「帝位と祖国への不動の忠誠と愛」によって知られた「領地貴族 поместное дворянство」だとしているが[5]，61年から

（1） Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 78.
（2） Там же, стр. 7.
（3） Валуев, стр. 61.
（4） П. А. Зайончковский, П. А. Валуев. Дневник П. А. Валуева т. 1. стр. 17-18. 以下の記述はこの小伝に負うところが大きい。
（5） 「ロシアの国内事情」なるノートである。«Исторический архив», 1958. № 1. стр. 148.

68年までの彼の内務大臣時代の政策は，農奴解放ほか一連の諸改革の必然性を認めた上で貴族の権利と地位を保護するというものであった．

だから彼の鋭い情勢把握の感覚も専制権力との運命の一体性を意識する名門貴族の危機意識なのであった．

62年から63年まで三度，そして先の79年にいま一度，彼が国家評議会改造案を提起したのはその危機意識に発していた．自由主義者のロリスとは出発点を異にしている．しかし，さしあたりロリスにとってのヴァルーエフの問題はそこにはない．

国家評議会案が63年に最終的に拒否された日の日記にヴァルーエフは次のように書いた．

「退出するさい，私は皇帝の書斎にあるイコンをおがんだ。帰途カザン聖堂で礼拝し，家でまた別のイコンをおがんだ．主なる神はよるべなき放浪者たるわれを庇護し給うであろう．……この家にもう長いことはならい．私の役割は終った．……去らねばならない．私はここでは明らかに縁なき人なのだ[1]．」

こういう感慨はすっかりおぼえて神ばかり拝している彼が以後の16年間，途中割引貸付銀行会長などをしていた四年間を除いて，内相，国有財産相，大臣委員会議長と終始政府の人であり続けるのを妨げるものではなかった．16の年から官途についた彼は皇帝の信任を失うことを恐れ，保身術の巧みな，虚栄心と嫉妬心の強い官僚であった．主観的には身を孤高に持して，辛辣な目を周囲に向けながら，現実には彼は彼の情勢評価も見解も支持しえないようなウルーソフやマーコフのごとき官僚的中間派の大御所であった．彼はその鋭い情勢評価の感覚を現実政治の中で政策化する政治家としての能力をついに持ちえなかった．そして冬宮爆破事件の日，彼は次のように書く．

「反逆の深い根についての責任は私一人を除いた政府全体にある，この日記はいかなる人々の見解と意見が支配的で，私がこの支配的な影響といかに不断に闘ったかを立証してくれる[2]．」

かかるものとして，彼はツァーリズム官僚の華である．ツァーリズム権力機構にひそむ官僚的ニヒリズムはおそらく彼にもっともよく体現されているのであろう．ロリス＝メリコフが対決することを迫まられたのはこの官僚的ニヒリズムの体現者，官僚的中間派の総師としてのヴァルーエフであった．

翌日，ロリス＝メリコフは陸軍大臣ドミトリー・ミリューチンを訪問した．ここでは彼は自分の就任に対する人々の反能，自分の決意などを語っている．ミリューチンは日記に書いている．

「頭がよく，柔軟で，誰とどういう意味のことを話すべきか心えているロリス＝メリコフはすでに四方八方からいろいろな厳しい苛酷な方策が押付けられると憤慨して語った[3]．」

強調部分はわれわれのロリス＝メリコフの行動様式論を裏付けているが，彼がミリューチンを信頼できるとしたのは，この陸相が政府部内でもっとも安定した，信頼になる改革派として知られていたためであろう．

彼の次弟ニコライも農奴解放立案の立役者として名高いリベラル官僚であったが，この兄弟は，マニュファクチュア経営の功により貴族に取り立てられたピョートル大帝の

（1） Дневник П. А. Валуева. т. 1. стр. 261.
（2） Валуев, стр. 58.
（3） Милютин, т. 3. стр. 217.

宮廷の罐焚人の末裔であり，その華々しく続いた農奴主的マニュファクチュア経営の破産から零落し，官途についた貴族の子であった．

ミリューチンは18の年から原稿書きで自活してニコライ陸軍大学に入った．この彼が当時の「恥ずべき奴隷制からロシア国民を救おうと熱烈に願う」青年の一人であり，自由主義者になったのは理解できる[1]．

一時母校の軍事地理学の教授を勤めた以外はカフカースでの軍人生活をおくり，61年陸相となった彼はゼムストヴォ改革ではヴァルーエフとわたり合って，ゼムストヴォの全身分性と自立性を強化し，74年には軍事改革を立案実施した．63年にヴァルーエフの国家評議会改造案を支持した彼は専制についてはどう考えていたか．

彼は引退後の日記に「実際にはおそかれ早かれ専制の原理に手をふれなければならなくなるとはいえまだその時は来ていなかった」と書いている．しかし彼の心にはアレクサンドル二世への愛があり，「合理的に，進歩の道を進む」専制権力，啓蒙的専制こそが彼の理想であったようだ[2]．先廻りになるが，彼はロリス＝メリコフの改革案について「ロリス＝メリコフも彼の自由主義的見解を支持した人すべても疑われたような立憲制の目論見をもっていなかった[3]」と書いている．ロリス＝メリコフがミリューチンに一般的な支持を求めながら，この先，彼の改革案作成の協力者には選ばないのは二人の自由主義の差異を示しており，したがって，このミリューチンの言葉はミリューチンの理解以上のことは語らないものと考える．

勤倹力行型の生活スタイルを持ち，自身言う通り，名誉欲や虚栄心のないこの誠実な人物は20年に近い陸相生活の末に，政治生活を「名誉あるカバラー[4]」と感じるに至っていた．その辞職をとどめているのは，皇帝をこの苦境において去るにしのびないという感情であった．かくて彼はイニシャチヴを期待しえぬ孤立した存在であった．彼の他にも自由主義的な人物はいた．

「赤い」大公として知られるコンスタンチン大公がいた．しかし，ロリス＝メリコフはミリューチンの一般的支持を求めるにとどめて，彼らとは接近せず，むしろ保守的な皇太子にアレクサンドル密着していった．このことは従来指摘されることがなかった．彼の委員会の設置が皇太子の主唱したものであるということからすれば，このことは当然のことのように思えるかもしれない．果してそれだけのことであろうか．

この皇太子は生まれつき頭が悪かった．第二王子であった彼は1865年兄のニコライが死んだため，皇太子となったのであるが，そのさい皇帝は彼を差しおいて彼よりもはるかに才能ある弟のヴラヂーミルを皇太子にするのではないかと噂されたという[5]．彼は単純な性格の持主で，父のような懐疑派ではなかった．死んだ兄がいまわの際に託していった兄の許嫁を妻として迎えて，叔父コンスタンチンの言葉によれば「番の鳩のように」暮らすという律義な彼は，病む皇后をよそに愛人を作り子までなした父や，妻を置い

(1) А. С. Дубнов, Экономические взгляды В. А. Милютина. М. 1958. стр. 22-23.
(2) Милютин, т. 4. стр. 89. 97.
(3) Там же, стр. 97.
(4) Там же, стр. 90.
(5) C. Lowe, Alexander III of Russia. London, 1895. p. 16.

て愛人のバレリーナと国外に遊ぶコンスタンチン大公を苦々しく思っていた[1].

彼の皇帝教育の師は宮廷内の保守派の中心人物たるストロガーノフ С. Г. Строганов とポベドノスツェフで，とくに後者の宗教教育の影響は強かった．しかし，ニヒリズムのつきまとうポベドノスツェフの政治哲学よりも，彼が紹介してくれるアクサーコフ И. С. Аксаков らのユートピア的な保守的スラヴ主義者の思想に皇太子の心は惹かれていたようである[2]．だから，皇太子にもアクサーコフ派の現状批判の気分はあったのである．

しかし，彼は自由主義者には不信を示し，政治制度の改革には強く反対した．80年1月の国家評議改造案審議のさいには，「招待される各身分代表になるのはしようのない批判屋．弁護士等々だろう[3]」と述べて，反対した．

この保守的だが，現情打開の志向をもつ頭の単純な皇太子は自らの提案した委員会の長官になったロリス＝メリコフに強い期待をかけた．2月から4月にかけて彼はロリスに会いたいから訪問されたいという手紙を多く出している[4]．一方，ロリスにはロリスの思惑があった．二人の関係は4月に入ってロリス＝メリコフが活動の総括を内容とする報告 всеподданнейший доклад を作成するさいによくわかる．4月9日彼は報告の草稿を皇太子のもとに送った．

「最高管理委員会長官に任ぜられた最初の日よりわたしはまさに殿下と同一の方針で事に処するとの誓いを立てたのであります．というのは，この事にわたしに委ねられた事業と祖国の平安の回復の成功はかかっていると考えたからであります．

覚書に完全なるご承認がえられるか，あるいは，そこに述べられた思想に何らかの論評をお加え下されば幸甚に存じます．ご論評はもとよりわたしの指針として受け入れるところです[5]．」

彼としてこの言葉にはいささかの偽りはなかろう．しかし，ロリス＝メリコフがこの報告を4月11日に皇帝に提出して承認された翌日の皇太子の書簡をみると彼のそういう意味がどこにあるかわかるような気がする．

「万才！親愛なるミハイル・タリエロヴィッチ，皇帝があなたの覚書をかくも寛大に，かくも信頼して承認されたことにわたしがどんなによろこんでいるか，とてもいい表わしえない。……今や大胆に前進しあなたの綱領を落着いて，ねばり強く貫き通すことができる．それは貴い祖国の幸のためであり，かならずやこの綱領と皇帝のご決定をひどく歪めるであろう大臣諸公（馬鹿な連中！）の不幸のためである[6]．」

彼はこの頭の単純な皇太子の心をつかむことによって，皇太子をあやつり，保守派をもって保守派を制しようとしたのである．

4月24日彼は「ロシア大地の悪霊」とよばれた反動的な文相トルストイ Д. Толстой の罷免に成功した．彼はトルストイに対する皇帝の信任をこわすのに，内相マーコフの反感をうまく利用した[7]が，この件は皇太子と事前に打合わせた上で行なわれている[8]．

（1） Перетц, стр. 84. Корнилов, указ. соч. стр. 266.
（2） Готье, указ. соч. стр. 248, Novum Regnum. № 1016, стр. 1018.
（3） Валуев, стр. 51.
（4） Переписка, № 1-12, стр. 103-106.
（5） Там же. № 13, стр. 106-107.
（6） Переписка. № 17. стр. 108.
（7） この経過は Валуев, стр. 68-69, 71-72, 76, 86.
（8） См. Переписка. № 18. стр. 108.

後任はリベラルな政策で知られたデルプト学区視学官，駐独大使の弟サブーロフ A. A. Сабуров で，トルストイが兼任していた宗務院総監には皇太子の師ポベドノスツェフが任ぜられた．「この措置は疑いもなく全ロシアに好ましい印象を与え，皆がロリス＝メリコフに心からお礼をいうだろう[1]」とミリューチンが評したこの最初の成功で彼の闘うべき思想の持主，一年後の最大の敵手にポストを与えることになったのは皮肉である．

国家評議会議員で，ロリスの委員会のメンバーでもあるポベドノスツェフは裁判改革に参加した先のモスクワ大学法学部教授として，当時一部では開明的人物であるという噂さえあった[2]．20歳の年から法律関係の官界を歩いてきたこの皇太子の師の政治哲学はまだ世に知られていなかったのである．バーンズの研究により，それを要約しておこう[3]．

彼の人間観はきわめてペシミスチックなものであった．人は生まれながらにして性悪であり，不平等であると彼は考えた．「すべての人間は虚偽であり」，「人の語るすべての言葉は何の役にも立たぬ自己欺瞞の言葉である」というのが彼の文章に頻出する言葉である．まずこのことによって専制政体の強固な統制が正当化される．彼にとってツァーリの宮殿の外なるロシアは「氷の原野，悪魔のすみ家」なのであった．一方，彼の歴史哲学によれば，政治制度は民族史に固有なものであり，民族的信仰によってその性格は決められるのである．ロシアにとっての固有な政治制度は専制である．また彼の政治哲学からしても，代議制度は私利私欲をはかる野心家の虚栄心を満足させるものとして排され，無制限絶対の専制こそ真の国家権力たりうるものとされる．

彼の理想の君主は聖王ルイ九世であったが，ロシア史においてはピョートル大帝を高く評価した．専制君主の役目は真実のクリスト教徒として身を持し，有能な勤勉な働き手を集め，「国民の利益」，すなわち「国家の利益」を代表することであった．彼はそのものとしては地主貴族に関心をもたず，むしろ中産階級的美徳を賞揚したといわれる．81年末日のアレクサンドル三世あての書簡の下書には次のようにある．

「良心にかけて申し上げます．あらゆる悪，あらゆる病と欠陥を数え上げなさいますな——それはとても多いのです．しかし，私は良い仕事も多いことを見ます．偉大な働き手．偉大な力の多いことを知っています．ただ彼らを支持し，元気づける人がいないだけです．……私の話し合った素朴な人々，権力の善と活動性への信頼にみちた人々は私の心を未来に対する大きな希望でふくらましてくれました[4]．」

そのような人の例として，周辺の書簡では若くしてモスクワ大学植物学教授の職を捨て郷里で村の小学校教師になった人が挙げられている[5]．

79年から80年の危機的情勢の中で，彼も「真剣に考えねばなりません．何事かなさねばなりません．別の人々を，別の体制を見付けねばなりません」と皇太子に書いた[6]．

---

(1) Милютин, т. 3. стр. 243.
(2) Корнилов, указ. соч. стр. 264.
(3) R. F. Byrnes, Pobedonostsev on the Instruments of Russian Government. Continuity and Change in Russian and Soviet Thought. Cambridge. 1955. pp. 113-128.
(4) Novum Regnum. № 45. стр. 66-67.
(5) Там же. стр. 348.
(6) Очерки истории СССР. 1861-1904. Под ред. С.С. Дмитриева. М. 1960. стр. 224.

ロリス＝メリコフの登場を彼はおそらくは共感をもって迎えたのであろう．彼はロリス＝メリコフの意図が見抜けなかった．彼が宗務院総監に就任して大喜びしている[1]間に皇太子の心はロリス＝メリコフに握られていた．

さて，ロリス＝メリコフの次の成功は8月6日の第三課と最高管理委員会の廃止，内務大臣更迭である．ながらく公衆の憎悪の的であったニコライ統治の象徴たる第三課の廃止によって同長官ドレンテリンは罷免された．内務省はロリス＝メリコフの握るところとなり，マーコフは新設の郵政省に移された．

ロリスは内務次官に大臣委員会秘書官カハノフ M. C. Каханов を抜擢した．これは口の悪いヴァルーエフによってすら「目立って有能て，非常なかんとタクトをもっている[2]」評される人物で，改革案作成にあたってロリスの片腕となる．

最高管理委員会の廃止も皇太子との連絡の上てのことであったが[3]，同じ時期になされた大蔵次官の人事についての報告ぶりを見るとロリス＝メリコフの掛け引きぶりがわかる．彼はキエフ大学総長で，著名な財政法学者ブンゲ H. X. Бунге を次官にして，大蔵省への足掛かりとしたのだが，皇太子には，つんぼ桟敷に置かれていた蔵相グレイク C. A. Грейг は「皇帝の毅然たる御意志」を受け入れたと報告している[4]．皇帝の意志，実はロリスの意志である．

5月，6月とロリス＝メリコフへの反感を強めてきたヴァルーエフは巻き返しに出ようとした矢先，以上のような機構改革，人事移動をやられて，すっかりまいってしまった．8月14日の日記に彼は書いている．

「私の目の前でおこることを見ていると何か歴史劇の舞台を見ているような気がする．つまり半分真実で，半分は創作で，結局本物ではない事件だ．まあ見ていよう．舞台装置も変るだろう[5]．」

俊敏なる老官僚ヴァルーエフにして，かくのごとくである．彼以下の凡庸なる頭脳にはロリス＝メリコフの張っている網の大きさはわからない．

次のロリス＝メリコフのあらたな勝利は10月21日に来た．蔵相グレイクは「依願免」となり，国家評議会国家経済部議長 председатель департамента государственной экономии Госуд. совета アバーザ A. A. Абаза が後任に任ぜられた．

このアバーザは夏以来ロリス＝メリコフの最大の協力者であった．もしも，ミリューチンの自由主義を零落貴族の自由主義だとすれば，アバーザの自由主義は製糖工場主・貴族の自由主義といえようか．農奴解放以前から製糖業にのり出したキエフの大貴族の子である彼はペテルブルク大学卒業後，8年間軍務にあったが，以後クリミア敗戦まで国外での経済事情の研究と自らの所領経営の改善に従事していた．57年，当時の改革派官僚のパトロンであったエレーナ・パヴロヴナ大公女の侍従 гофмейстер に任ぜられたのち，60年代の経済的諸改革に参加し，鉄道会社の経営にも手を出した．65年から大蔵省に関係し，会計検査院総裁をへて，75年より前職にあった[6]．

（1） Милютин, т. 3. стр. 243.
（2） Валуев, стр. 69.
（3） Переписка. № 27. стр. 115.
（4） Там же. № 26. стр. 113.
（5） Валуев, стр. 110.
（6） Министерство Финансов. 1802-1902. т. 1. Спб. 1902. стр. 399-400.

彼は性格的にミリューチンとはまったく異なっている．ロリス＝メリコフと同じ近衛驃騎兵の出の彼は今なお，男前で，ギャラントで，しかも精神は健全そのものといった近衛騎兵の風を保っていた．彼はこの時二度目の妻にも飽きて，自由主義者のきこえ高いネリドフ将軍夫亡人の家に同棲している[1]．

おそらく，控え目な線を安定的に堅持しているミリューチンと異なり，彼の自由主義は振幅が広く，当時ミリューチンの見解をこえる急進性をもっていたところに，ロリス＝メリコフが彼を協力者に選んだ原因があるのだろう．

ヴァルーエフはロリス＝メリコフがこのネリドヴァの自由主義的なサロン，その主人公アバーザに踊らされたかのごとくに回想している[2]．しかし，その社交界のライオン然とした得な顔で中央政界を渡ってきた調子のいい自由主義者アバーザと地味な官界の裏街道を30年間歩いてきた遠望深慮の自由主義者ロリス＝メリコフとの組み合わせにおいて，人間の一枚上手なのがロリスの方であることは疑いのないところのように思われる．

かくして，ロリス＝メリコフは文部，内務，大蔵の重要三省を握ることに成功した．一方，次章でみるようにこの時期にコンスタンチン大公派と彼との接触がはじまる．

皇帝の次弟で，「赤い」大公といわれたコンスタンチンは，60年代はじめの改革派官僚の中心をなし，農奴解放の立案などに参画した．海軍大将の彼は海軍省をおさえて，商業海運の発展にもつくしたりしたが，義勇艦隊の中心人物皇太子，ポベドノスツェフとこの面でも対立することになった[3]．彼には「反貴族主義」があったといわれ[4]，政治制度改革の提案者の一人でもあるが，保守派のトルストイを海軍省の部下として高く評価する[5]というような甘いところがあった．このころの皇太子と彼との不和は必ずしも政治的なものではなかったが，きわめて鋭いものであった．

この彼のまわりに当時いたのはユダヤ人の買占人の息子で，デカブリストを兄にもつという国家評議会秘書官ペレトツ[6]と「非常にしっかりした，誠実な人」だが，「一生いかなる改革も実現できないようなタイプの官僚[7]」とヴィッテに評される会計検査院総裁ソリスキー Д. М. Сольский の二人である．彼らはいずれも自由主義的な官僚であった．法相ナボコフ Д. Н. Набоков もどうやらこのグループに近かったようである．他の大臣たちはいずれも官僚的中間派をなしている．

ロリス＝メリコフの登場以後，彼とツァーリ政府の政治家たちの交渉を後付けてみると，以上のようになる．彼は改革派とはあまり接近せずに，保守的な皇太子に密着し，そのことにより保守派を追い，自らの支持者にポストを与え，中間派の策動を封じたのである．それには皇帝や皇太子が国内情勢から危機を感じ，従来とは異なる人と政策を求めていたという事情が力あるのはいうまでもないが，ここにロリス＝メリコフの巧妙

(1) Витте, указ. соч. т. 1. стр. 216-218.
(2) Валуев, стр. 62. 80年2月9日の日記に対する81年12月30日付の註。
(3) Предисловие А. Е. Преснякова, Перетц, стр. V.
(4) Дневник П. А. Валуева, т. 1. стр. 151.
(5) Перетц, стр. 138.
(6) Предисловие А. Е. Преснякова, Перетц, стр. III.
(7) Витте, указ. соч. т. 1. стр. 241-242.

な工作をもみとめなければならない.

第2章　ロリス＝メリコフの改革案

1

ロリス＝メリコフの改革案とは1881年1月28日の皇帝に対する報告（以下改革案報告と称す）に述べられる政治制度改革提案である．まずその内容を見よう[1].

最初に彼は就任以来自分の行なった施策を列挙している.

「国家および治安を守る政府諸機関の行動の統一．行政流刑者，とくに学生層の行政流刑者の運命の緩和．帝国の教育指導への理解ある配慮．従来未処理のままに放置されていた若干の陳情を満足させたこと．およびその要求を調査することを主目的とする最高法院法官による監察 сенаторские ревизии を命じたことに表われている広汎な地方ゼムストヴォの要求への政府の注意の増大．人民に憎まれた塩税の廃止．その目的を果していない出版法規の再検討の開始.」(стр. 162)

これら施策の効果はどうであったか.

「国家生活がその正しいあり方に徐々に戻っていることは公衆の穏健な部分の内的志向を著しく満足させ，一時的に動揺したロシアの政府権力の強力にして堅固なることへの信頼を強化しました．……（上記の方策は）社会の不安な状態を宥め，陛下が父祖以来の帝位につかれた最初の日から企図された国家改革の大事業の完成のために全力を尽して陛下にご奉仕するという忠誠な心構えを呼び出しごとく公衆に好ましい影響をおよぼしましたし，今もおよぼしております.」(Там же.)

「そのような気分を利用する必要がある.」と彼はいう．何のためにか．「改革の完成と当面日程に上っている諸問題の解決」のためにである.

「陛下の御治世の偉大な諸改革は，これと同時に（しかし，これら諸改革の引きおこしたものでありません）見られた虚偽の社会学説の若干の現われのもたらした諸事件のために，今日まで，一部は未完成で，一部は相互の調整が不十分であります。その上，つとに陛下のあらかじめご指示になられた第一級の国家的意義を有する多くの問題が諸官庁の官房に渋滞したままであります.」(стр. 163)

しかしながら，この状態を打開するための資料はすでに多く集められているのである.

「最高法院法官による監察は地方の実情と地方の要求を調査することを主目的といたしており，これらの資料をさらに豊富にし，ことを成功に導くには中央機関の改革作業にいかなる方向を与えることが必要であるかを地方のデータで明らかにする筈であります.」(Там же.)

「しかし，これらの資料を最終的に検討するには，地方の条件と要求を真近に知っている人々の実務的な指示がなくては不十分である.」――こう述べた彼はこれを解決するところの思想を提示する.

「以上述べてきましたところより，次の思想に留意せざるをえないというのが私の信念であります．すなわち現在必要とされる施策の立案に公衆の参加を呼びかけるということはこれから先反逆と闘争するのに有益かつ必要な手段であります.」(Там же.)

問題は「この思想実現の方法」にあるとされ，その方法としての西欧的な国民代表制とゼムスキー・サボールが否定される.

「何よりもまず皇帝陛下に改めて以下のことを表明申し上げるのを義務とするものであります．すなわち，私の深い信念によれば，西欧より借用された形態での国民代表制 народное представитель-

(1) Материалы, № 2. стр. 162-166. 引用ページは文中に表示する。

ство を組織することはまったく考えられません немыслима. これらの形態はロシア国民には無縁чужды なものであるばかりか，国民の根本的な政治観を揺がせ，そこに混乱をもたらす可能性を有しております．かかる混乱がもたらされればその結果は予想しがたいものであります。同じく，ロシア国家の旧時の形態の信奉者たちが主張しておりますゼムスカーヤ・ドゥーマ Земская дума もしくはゼムスキー・サボールを形成するを是とする提案も時宜に適わぬというだけのものではないように愚考されます．現代はその代表制の旧時の形態の行なわれていた時期より隔たること遠く，人々の考えも，ロシア国家の構成要素も変りましたし，また現在の地理的条件がらしましても，古き代表制の単なる復活は実現が難く，またいずれにしても過去へ復帰せんとする危険な試みであります．」(Там же.)

しかし，公衆の一部にみられる「これらの意見は社会的事業に奉仕したいという熱した要求の表現に他ならない」と認められる．この要求をどうすべきか．

「農民改革の立案のさい陛下のご英断により試みられた制度によってこの要求に合法的な出口を与えることがもっとも実際的な方法と愚考されます．勿論この制度を現時点の諸要求と諸課題に適用すべきであります．」(Там же.)

以上のごとく，改革の必要性を説明し，その根本原則を明らかにした彼はここから改革案の具体的な展開を行なう．

「このような根本原則より出発し，現在地方にはすでに，中央政府の審議すべき諸問題に関して情報と結論とを提出しうる常設の機関が存在することを考慮すると，次のようになすべきであると愚考する次第です．すなわち，1858年に組織された編纂委員会のごとき臨時の準備委員会 временные подготовительные комиссии をペテルブルクに設置し，これらの委員会の作業をゼムストヴォと若干の大都市の代表の参加を得て検討するという考えを採用すべきであります．」(стр. 164)

すなわち提案されているのは常置機関の設置ではなく，当面の問題解決のため臨時機関である．ではその委員会の構成はどうであろうか．

「これらの準備委員会のメンバーは中央政府官庁の代表者と陛下のご承認 соизволение を得て招請される事情に通じた сведующие 思想穏健な官吏もしくは非官吏で，学問上の専門的業績や国家統治または国民生活のあれこれの部面での経験によって広く知られた人物の中からその都度陛下のご指名 указание によって決められます．」(стр. 164)

議長は政府側の人物が任名され，監察を行なった最高法院法官も加わる．

委員会は「最初」は二つに限定される．第1は「行政・経済委員会 административно-хозяйственная комиссия」で，その課題は а) 地方の県行政の改善，б) 農民の要求に応じた2月19日令その他農民法規の増補，в) 一時的義務負担関係の停止と買戻金の軽減，г) ゼムストヴォ法と都市自治法の再検討，д) 食糧蓄蔵制度，е) 畜産保護の方策である．

第2は「財政委員会 финансовая комиссия」で，人頭税やパスポート制度の問題を扱う．議題はおって内相，蔵相協議の上で報告すると書かれている．

要するに「委員会の義務は陛下のご意志によって指定される枠内での法律案の作成でありましょう」とされるのである．作成された法案はどうなるのか．それは「最高権力の指示により」「一般委員会 общая комиссия」に送られる．

一般委員会の議長は皇帝によって任名される．メンバーは両準備委員会の議長と委員，それから地方の県と都市の代表（文章中には代表という言葉はない）である．地方

代表には，ゼムストヴォ法の施行された諸県と若干の大都市からは県ゼムストヴォ集会と市会の選ぶ選出代表 выборные 各二名づつ，ゼムストヴォ法未施行の諸県からは「地方当局の任名する人が出る．県ゼムストヴォ集会と市会からの選挙の場合，「真に有益な，事情に通じた人々を加えるために」，ゼムストヴォ評議員や市会議員 гласные 以外からも選挙してよい．

一般委員会の検討期間は最大限２カ月とされる．

ここで承認された法案は所管大臣の結論 заключение を付して国家評議会に提出される．

これに続く文章はきわめてまわりくどい．

「そのさい当面する国家評議会の仕事を容易にするために，社会諸機関 общественные учреждения の代表を若干名，10ないし15名ほど，議決権を与えて国家評議会の構成メンバーに加えることを陛下におかれましてはお命じになるのがあるいはよろしいでありましょう．」(стр. 165)

以上の提案をまとめておこう．すなわち，第１に政府の任名する「事情に通じた穏健な」人々よりなる準備委員会の設置，第２に各県ゼムストヴォ，大都市自治体選出の代表と準備委員会の委員よりなる一般委員会の設置，第３に国家評議会へのゼムストヴォ，都市自治体代表の若干名の参加である．第３の提案はきわめて弱々しい．

次にこの改革案の意義の説明に入り，その諮問的性格と西欧立憲形態との差異が説明される．

「準備委員会の作業のみならず一般委員会の作業も専ら諮問な意義 значение исключительное совещательное をもち，立法問題を提起し，それを国家評議会で検討するという現存の制度にいささかの改変を加えるの意義を有しません．

国民生活の利害に密接な関係を有する最重要の諸問題の予備的立案についての上述しましたごときすでに試験済みの制度の確立には西欧の立憲形態とは何ら共通するところはありません．最高権力が是とする時，是とする枠内で立法問題を提起するの権利は専一に最高権力のものとして保持されております．」(Там же.)

それから，この案実現の準備に関する説明に入る．ここでは，最高法院法官による監察終了時までに各政府諸機関においても指定された準備委員会の議題に関連する資料を整理すべきこと，その整理にあたって各機関当局が望むなら，「その学識経験によって作業の成功を促しうるような部外者 посторонние лица」を参加させることができること，政府諸機関は準備委員会に生の資料を提出してもよいし，法案化して出してもよいこと，これらの「準備作業」は本年秋までに終わらせ，準備委員会を開くこと，一般委員会の招集は明年初頭，各県ゼムストヴォ集会の会期終了後とするなどが提案されている．

最後に今一度この改革の動機が語られ，皇帝がここに述べられた思想と提案を是とするなら，その実施の方法を皇帝の選ぶ若干名で検討したいと述べて，この覚書は終っている．

以上がロリス＝メリコフの改革案報告の内容である．

この内容は従来指摘されたようにきわめてつつましいものである．先行する一連の政治制度改革案と比べても，提案される改革の内容はもっとも小さい．国家評議会そのも

のにゼムストヴォその他の選出代表を加えるというヴァルーエフ，コンスタンチン大公の両案よりも後退しているのは明らかである．ヴァルーエフは63年4月に上記の案が却下されたあと，同年11月に，県ゼムストヴォ集会より選出された代表よりなる国家評議員大会 съезд государственных гласных を国家評議会に付設し，ここで法案を審議して，それをさらにこの大会の代表16名を加えて国家評議会全体会議で審議するという案を提案した[1]．この案にロリス＝メリコフ案は類似しているが，彼の提案は常置機関の提案ではない点で，このヴァルーエフ案よりも後退している．

提案の内容よりみれば，たしかにそうである．しかし，この提案の歴史的評価はこの内容からは出てこない．なぜなら，常に政治的な提案はその主唱者の意図となされる状況によって一定の歴史的意味を与えられるからである．したがって，われわれは一まず改革案を置き，その準備過程の分析を試みなければならない．

2

改革案の準備過程を論じたゴリーツィンはロリス＝メリコフの1880年4月11日の報告と改革案報告とを比較し，後者にある「現在必要とされる方策の立案に公衆の参加を呼びかける」という思想は前者では否定されているとした．彼はこの変化を「最高管理委員会の経験が政府と社会のもっとも穏健な分子との間にも横たわっている深淵にロリス＝メリコフを開眼させた[2]」ことに求めた．彼はまたコシェレフの証言を引きながら，そこに現われたロリス＝メリコフの思想と改革案との関係も明確にしてはいない．

たしかに彼は史料の不足を断わっている．ヘイフェッツによれば，決め手になる多くの史料が存在する．われわれもその史料の簡単な紹介を利用しうるだけであるから，きわめて不十分な分析たることはまぬがれえない．しかし，改革案評価に必要なかぎりの事実は明らかにしうると思う．

まずゴリーツィンの問題にする1880年4月11日の報告[3]から検討していこう．これは2カ月を経た最高管理委員会長官としての彼の活動を総括した．皇帝に対する報告である．

そもそもゴリーツィンのようにこの報告にはロリス＝メリコフの思想がそのままの形で述べられていると前提することができるだろうか．われわれはすでにゴリーツィンの知りえなかったこの報告についてのロリス＝メリコフと皇太子の交渉を知っている．よくないところがあれば指摘してほしい．それを聞いてから，成稿にするために，下書をお送りするといったロリス＝メリコフにタクトがあったのは当然のことだとわれわれは思う．おそらくこの報告には彼の思想を述べた部分とそうではない部分が並んでいるのではないか．それを読み取ってみたい．

---

(1) Зайончковский, указ. соч. стр. 36-37.
(2) Голицын, указ. соч. стр. 129-130.
(3) Материалы, № 1. стр. 154-161. 以下引用は文中にページ数のみ表示する。ヘイフェッツはロリス＝メリコフのアルヒーフ中にあるバチヤーノフ Батьянов の「最高管理委員会の任務」という覚書がこの報告の基礎になっているというが，残念ながら詳細は不明である。Хейфец, указ. соч. стр. 197.

まず，冒頭で着任したさいの自分の決意について述べ，「穏健な人々と緊密に同盟して в тесном союзе с людьми благомыслящими はじめて，彼らの共感と援助があってはじめて，成功が得られると確信する」(стр. 154) と書いている．おそらく穏健分子に一定の譲歩を行ない，革命運動と闘うという政策はツァーリズムの一貫した方針であったろうし，ヴァルーエフの政治制度改革の意図もそこに置かれた．しかし，権力と「公衆」との関係を「同盟」というような言葉で表現する思想とはヴァルーエフは無縁であった[1]．この「同盟」思想はロリス＝メリコフの自由主義的信条より出ているものである．

ついで委員会設置に対する人々の反応について述べる中で，彼は「ロシアにとってさほどに苦しかった時期にロシアを遙ぎなく繁栄の道に置き給うた君主が，同じく，毅然として自らのご意志の執行者に，この道を進むにさいして遭遇した人為的障害よりロシアを救う手段を指示し給うであろうという確信と期待」(стр. 155) が現われたことを述べ，これは「未来のよき保障」で，最大限に満足させねばならないとしている．これは次に来る主張の伏線として置かれる．

すなわち，彼は最高管理委員会の活動を述べる中で，「現下の困難な状態」の原因を相当なスペースをさいて要旨ほぼ次のように述べている．

社会主義学説は現帝の治世のはじめにはロシアでは影響力は小さかった．というのは「国内にはそれに適合する農業・工業プロレタリアート階級が存在せず，また諸改革によって作り出された生活は精神的に発達した社会層の知的なエネルギーを多くの点で満足させていた」からである．当時ほど「政府権力の勢威」が高まり，公衆が「君主に対する意識的な忠誠心」で貫かれていた時はなかった．「そのような気分が永続きするかどうかは改造事業そのものの進行，その正しい提起，その調整，不断の補正にかかっていた．」しかしながら，「残念なことに事態の一般的な経過はそうではなかった．」権力の代表者は新たなる事態に対処できず，ある者は改革事業の派生的欠陥をとらえて改革そのものを否定し，他の者は改革の礼讃に終始した．委員会ばかりが生まれて，一切が停滞した．農民問題も，裁判制度，ゼムストヴォ，都市自治体も新たな手が打たれずに改革の意義は失われんとし，僧侶と貴族の両身分の状態も寒心に堪えない．「そのような現象で触発された不満，そして皇帝陛下がその解決を指示された焦眉の問題が進展を見せなくなったことからくる多少とも根拠ある幻滅は毎年不満を覚える人々の数を増し，国家体制原理を支える地盤を不安定にした．これと平行して秩序維持の任務を与えられている政府諸機関の行動の不統一がはなはだしくなり，社会主義の虚偽思想の影響力は増大した．」「積極的な性格の施策と切り離して懲罰的な施策のみが取られたため，悪は癒されず，新たに不満な人々が多数生み出されたのである．」(стр. 156—158)

ここはこの報告の核心部分をなくしている．このような分析から当然帰結される政策は改革事業の不断の推進である．冒頭の部分と結びつければ，この報告の半分以上のスペースを費いやして彼が述べようとしている主張は，穏健な人々と緊密に同盟して改革

(5) ヴァルーエフは62年6月26日の覚書の中でその改革の意図を，政府が大胆な行動に出て先手を取り，「大衆を驚かし，威圧する」ことだと説明している。«Исторический архив», 1958, № 1, стр. 143.

事業を不断に推進するという政策路線である．この路線は改革案報告では明確に提示されていた．これは彼の信条より出たものである．

しかし，彼はこの現状分析のあとでそのような路線を明確に提示することを行なっていない．おそらく，その表現はラヂカルにすぎるという判断があったのであろう．それ以外の結論は出ないという形で，自らの主張を表わすことを彼は限度としたのである．

そういう部分のあとに，ゴリーツィンの問題にする「国民代表制」否定論がくる．

彼は公衆の種々の期待を列挙する中で最後に「西欧から借用される形態，もしくは古きロシアの原理，もしくは国家評議会のメンバーにゼムストヴォ代表を加えるという形，そのいずれかによる国民代表制の形成」の要求を上げて，次のようにいう．

「私の深い信念によりますと，これらの提案のような改造はいかなるものでも現在有益でないばかりか，まったく時宜に適わぬ несвоевременна が故に有害であります．民衆はそんなことを考えたこともなく理解し，ないでありましょう．教養ある階層は……現在不満を感じる状態にあります．すべての不平，雑多な願望が代表によって持ちよられ，政府のすべての活動の批判とともに政府に提出されるでありましょう．ところが現在は政府は……それらの批判を論駁できないのであります．この方策そのものが状況に強いられたものという形をとり，国内でも国外でもそう理解されましょう．そのような方策がたとえいずれかの形で陛下の大御心によるご計画に入っておりましょうとも，現在そのような措置は時宜に適わぬというのが私のまったき信念であります．」（強調原文．стр. 159）

皇帝が「これは私の信念でもある」と書き込んだ[1]最後の一句がはしなくもロリス＝メリコフの意図を洩らしているように思われる．「穏健な人々との緊密な同盟」を主張する人間が，一体何故に皇帝の御意志でも承服できないなどと大見得を切って「代表制」の時期尚早性を主張するのだろう．おかしいではないか．この文章と改革案報告の代表制否定論とを比較してみると，ここでは「時宜に適わぬ」とされたものが，向うでは「考えられない」，「無縁である」，「時宜に適わぬというだけのものではない」とされるのである．明らかに否定の調子は改革案報告の方が強い．

もしもこれが逆になっていれば，われわれもゴリーツィンの意見に賛成するのだが，問題はゴリーツィンの考えるほど単純ではないのである．国民代表制の否定の表現が改革案で強くなっているのは，まさにそこでは政治制度の改革案が提示されるからだ，と考える以外にはなかろう．

コンテキストによって国民代表制の否定の調子が変わるということは，この否定が戦術的表現であることを示しており，したがって原理的肯定を意味する．先にわれわれは彼の全ロシア意識を彼の政治理念の要として認めた．その時述べられていたのはゼムスキー・サボール否定論であった．とすれば彼が戦術的に否定しているのは，主として「西欧より借用される形態」での国民代表制ではないか．われわれはここにロリス＝メリコフの自由主義の立憲主義的性格の一つの論拠を得る．

さて，4月11日の報告に立ち返えれば，ここで国民代表制が否定されるのは，縷々書き綴ってきた彼の政策の基本路線への危惧から皇帝と皇太子の気を外らすためであり，また大袈裟に否定することによって，彼らの反能をうかがうというためだったのである．まさに皇帝は報告の半ばをすぎたここにきてはじめて積極的に反応を示したのである．

（1） Материалы. № 1 стр. 159. примечание.

次に彼はとるべき具体策に移り，5項目の措置を上げている．1）革命家に対する断乎たる処置．ただし過失程度の罪の人を革命家と混同してはならない．2）弾圧に当っては権力の行動の統一を行なう．3）すみやかに臨時的な措置より合法的事態へ復帰する．4）以下のごとき焦眉の問題の解決に注意を払う．僧侶の道徳水準の向上，人頭税改革，分離派信徒への権利付与，パスポート制度の再検討，農民の移住制限の解除，県行政機関の改造，雇傭関係の調整，新聞雑誌の指導．5）文部省に対する信頼の回復．（стр. 159—160）

これらの方策が雑然と思いつきのごとく列挙されているのには理由がある．それは最高管理委員会設置の建前からすれば内政一般にわたる政策を立てることは同委員会の権限のうちには，入っていないからである．この報告の結びで，彼は委員会の権限の問題にふれて，「国家秩序と公共治安の維持」という「広範な，複雑な任務」遂行のためには「純警察的な方策」だけでは不十分で，「国家的な施策」が必要であり，それらの施策が「時宜に適うものであるか否かの審議」は委員会の権限とされねばならないと提案しているのである．（стр. 161）

明らかに，この報告全体の意図は穏健な人々との同盟による改革事業の不断の推進という政策路線を説いて，彼の委員会の活動権限の拡大への承認を求め，合わせて皇帝，皇太子の政治制度改革への意向を知るところにあったのである．

そう考えると，対策（4）と（5）の間に目立たぬ形で書かれた次の提案の意味もおのずから明らかである．

「活動を渇望する興奮した知性を正しい仕事によって落着かせるために，貴族，ゼムストヴォ，都市を地方的な要求に近い問題へ参加させることは有益でもあり，私の意見では必要であります．この参加は社会諸機関そのものの選挙に委ねられるのは望ましくなく，権力は常にあらかじめ定められたプログラムにより，その限界内で行なわれる経済的，財政的問題の検討にその労働と知識が利益を与えずにはいないもっとも事情に通じた穏健な人々をそれらの機関の中から指名することができます．」（стр. 160）

この提案は先の「国民代表制」否定論に対応しているものであるが，先の分析からこれも一種の観測気球的提案だとわれわれは考える．皇帝はこの部分に「これに私は完全に同意する[1]」と書いたのである．

以上のこの報告が皇太子によって支持されたことはすでにみた通りである．皇帝は全体として次のように論評した．

「お前の考えを腹蔵なく述べてくれて感謝する．それはほとんどすべての点でわたし自身の考えと一致している．私が課した重い任務をお前が完全に理解していることを知ってうれしい．お前が私の信任を裏切らないよう神が助けてくれることを祈る[2]．」

ロリス＝メリコフの政策の基本路線は一応皇帝と皇太子によって承認されたかのようである．それとともに二人が国家評議会政造案を含めて代議制へ向う政治制度改革に反対し，高々「事情に通じた穏健な人々」の招集に同意するにすぎないことも確認されたわけである．とすれば，事態の急変がないかぎり，政治制度の改革案はいやおうなし

（1） Там же, стр. 160. примечание.
（2） 報告の第1ページに書きつけられた。Там же, стр. 154.

に，この「事情に通じた穏健な人々」を招集するという考えから出発せざるをえなくなるであろう．ここでわれわれはこの4月11日の覚書に何気なしに述べられたかのごときこの案が81年1月の改革案の準備委員会の構成原理とされていることを指摘しておこう．

3

ヘイフェッツによれば，「事情に通じた穏健な人々」を招集するという提案は，農業大会 сельскохозяйственные съезды に関するロリス＝メリコフの覚書，ゼムストヴォの代表を加えた特別委員会を内務省に設置し，ゼムストヴォの改革案を作成するという提案を行なった5月の内相あて通牒 отношение，また最高管理委員会と第三課廃止を提案した7月26日の覚書に見られるという[1]．残念ながらその詳細は知りえない．それを知りうれば，4月から8月に至る時期に彼が皇帝の承認の確認されたこの原則をどう料理しようとしたかがわかると思うのだが．

事態の進展は8月に入ってから認められる．8月6日内務省長官 управляющий министерством внутренних дел[2]となったロリスは8月11日，7県で最高法院法官 сенатор による監察 ревизия を行なうことを皇帝に建議した．内務省のみならず，他の官庁にも「多くの枢要なる問題」についての情報を与えるというのが説明された理由であった[3]．

皇帝はこれを承認し，4名の最高法院法官が派遣されることに決まった．監察のための訓令は内務，大蔵，法務，文部の4省の協力で作成され，9月2日に成案となった．それによれば監察の対象となる事項は内務，法務，国有財産，文部の4省所管事項で，内務省所管事項は革命思想の流布程度，行政流刑制度の印象，農民の気分，地方住民の経済状態，農民立法，ゼムストヴォ法，都市自治法の欠陥など広範な調査事項が上げられている[4]．

ロリス＝メリコフはこの時もまた皇帝のもとに提出する前に皇太子に報告するという手をとり，しかもその席につんぼ桟敷に置いた大臣委員会議長ヴァルーエフをよぶことにした[5]．この監察を「全治世に対する自発的な批判[6]」だと憤慨しているヴァルーエフもこれでは文句をつけることもできなかった．それが行なわれた9月15日の日記に彼は書いている．

「結果はあらかじめわかっていた．この手続一切はまったく無駄に考え出されたものだ．
It is hard to play every day a losing game, and to play it for years![7]」

いい気持で承認を与えていた皇太子も，嫉妬まじりの無力感に襲われたヴァルーエフも，この監察の背後に何があって，これがどういう意味をのちに持ってくるかは予想できなかった．

---

(1) Хейфец, указ. соч. стр. 198.
(2) 大臣 министр となるのは11月15日のことである。その理由はわからない。
(3) Переписка. примечание. стр. 129.
(4) Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 22-27.
(5) Переписка, № 28, 30. стр. 116-117.
(6) Перетц, стр. 7.
(7) Валуев, стр. 114.

改革案報告の中で最高法院法官による監察がいかに重要な機能を与えられるかをわれわれはすでに知っている．ヘイフェッツが明らかにするところによれば改革案の大綱はこの監察の訓令作成に関連して，ロリス＝メリコフと新内務次官カハノフ，国家評議会経済部会議長アバーザの3人によって決定されていたのである．

ヘイフェッツの挙げるカハノフの8月22日付のロリスあて書簡は「われわれの重大な事業は進展しています」．「大草案 большой проект」の作成はまったくうまくいっていると書いている[1]．かくして得られた情報に基く改革案の骨格は，上記の2人の協力をえてほぼ8月に決せられており，最高法院法官の監察はまさにそのための第1の工作であったのである．

9月には他に二つの注目すべき動きをロリス＝メリコフは見せている．まず彼はこの月皇帝に対して行なった報告の中で次のように述べた．

「若干の諸県では凶作が数年来続いておりまして，新たに穀物の凶作が来れば，事態は余病を併発し，税の順調な納入に悪影響を与え，危険思想分子の教唆煽動によっては農民の間に騒擾もおこりかねまじき気配であります[2]．」

この年も凶作になるきざしはすでに見えていて，1，2カ月もすれば，それは決定的なものとなる．投機もからんで穀物価格は高騰する．11月には，彼は首都の穀物商人を集めて，「必然性によって正当化される以上の現在の極度に異常な穀物価格は自分が防止すべき義務を負っている民衆騒擾もおこしかねない．この故にすべての穀物商人は24時間以内に穀物価格を引き下げなければ首都から行政措置で追放する[3]」といい渡さざるをえなくなる．

このような認識が彼の危機意識を強め，その使命感をまたかり立てたことは間違いないが，一方作成されつつある改革案の実現には有利な条件として彼はこの情報で皇帝を大いに攻め立てたのでもあろう．

今一つの動きは9月6日の大新聞，雑誌編集者たちに対する彼の談話である．彼の時代になってから，数々の新たな自由主義的な新聞雑誌が発行を許可された．例えばスラヴ派の自由主義者コシェレフ А. И. Кошелев が資金を出し，ゼムトヴォ活動家スカロン В. Ю. Скалон を編集者とし，モスクワ大学教授でのちの第一国会議長のムーロムツェフ С. А. Муромцев らの自由主義者を寄稿者とする新聞「ゼムストヴォ Земство」が許可を受けた[4]．このムーロムツェフとスカロンはロリス＝メリコフ登場の直後，3月にモスクワの社会活動家20余名の連名で「国を現状から救い出す唯一の道は思想，言論信条の自由などの人権を堅く保証し，ゼムストヴォの代表よりなる特別の自立的な会議を招集し，これを国家生活に参与させることである[5]」という建白書をロリス＝メリコフのもとに提案した人々であった．このような人々による新聞，雑誌がロリス＝メリコフに期待をかけて，立憲制論議をはじめたのは容易に想像される．ロリス＝メリコフは

(1) Хейфец, указ. соч. стр. 198.
(2) Гр. Лорис-Меликов и Александр II о положении в России в сентябре 1880. «Былое», 1917, № 4 (26). стр. 35. цит. История СССР. 1861-1904. стр. 221.
(3) Перетц, стр. 9.
(4) Корнилов, указ. соч. стр. 228-229. История Москвы. т. IV. М. 1954. стр. 378-379.
(5) G. Fisher, Russian Liberalism. Cambridge, 1958. стр. 65-67.

その彼らにこの時何を語ったのか．ムーロムツェフの回想を引こう．

「1880年9月6日内相ロリス＝メリコフ伯は大新聞，雑誌の若干の編集者を自分のところへ招いた．これは，ヨーロッパ流の代表議会の形であれ，わが国の往時のゼムスキー・サボールの形であれ，公衆を立法と統治に参加せしむることの必要を論じて，無為に公衆の精神を動揺させることがないように彼らに説くという特別の目的のためであった．そのようなものは何ら考慮されておらず，ジャーナリズムのそのような夢想的空論は，それによって無為にかき立てられる公衆の期待が自分の名と結びつけられているが故に，自分にはなおさら不快である．自分はそんなことをするいかなる委任を得ていないし，自分としてもそのようなものは考慮していない．現在なすべき……もっとも必要なことはすでに存在している新設の諸機関にしかるべき力を与え，古い体制の機関を目的のために必要とされるかぎり変容させて，それを一致させ調和させることだと考えている．彼はこう説明した[1]．」

ロリス＝メリコフは「魔法使の弟子」なのだろうか．決してそうではない，彼は立憲制論議が彼の名と結びつけて行なわれ，彼がそのような改革を準備中であるかのごとくいわれるのを公式に否定して置かなければならなかった．そうでなければ彼の準備している改革案への皇帝や皇太子の示すであろう抵抗を痲痺させることは覚束ないからである　この談話もまた彼一流の政治的ジェスチェアであった．

しかし，もとより公論の沈滞は彼の望むところではない．当時の自由主義者の大立物コシェレフに彼が1880年秋に語ったとして一般に知られる次の言葉をわたしはこの談話の後に述べられたものだと推定する．

「ゼムスカーヤ・ドゥーマの招集には皇帝の同意を得ることはまったく期待しえない．しかし，自分はゼムストヴォからの選出代表 выборные とゼムストヴォ未設置の諸県から政府の招集する人びととで，一般的な общая，かなり人数の多い委員会を開くことを考慮している[2]．」

公式には真向うから否定せざるをえないロリス＝メリコフは裏面で秘かに自分の意図をもらしたのである．それがしかるべく伝えられるのを予想していることはいうまでもない．

ここで注意しておくことは，コシェレフのゼムスカーヤ・ドゥーマは古きモスクワの制度の復活というアクサーコフ流の時代錯誤性をもたず，実質的な立憲制議会の性格をもつものであったことである[3]．

ロリス＝メリコフのジャーナリストへの談話は政府部内にも波紋を投げた．おそらく皇帝はじめ保守的な人々はこのような談話という形式には眉をひそめたかもしれないが，その内容には安心したろう．しかし，コンスタンチン派に与えた印象は逆であった．

コンスタンチン大公はこの年夏，その忠実な副官ペレトツに，ゼムトヴォと貴族の代表 гласные の会議を国家評議会に付設するという改革案の起草を求めていた．ペレトツが起草した案では，その会議から1名の代表を国家評議会へ出席させ，諮問意見を答申させるというものであった[4]．9月28日ペレトツはそれをソリスキーに見せた．ソリスキーは10月10日それを返えして，大賛成だが，皇太子とコンスタンチン大公の仲が

(1) С. А. Муромцев, Статьи и речи. вып. V. цит. Корнилов, указ. соч. стр. 229.
(2) А. И. Кошелев, Записки. Берлин, 1884. стр. 253. цит. Голицын, указ. соч. стр. 131.
(3) Гармиза, указ. соч. стр. 119-120.
(4) Предисловие А. Е. Пресняков. Перетц, стр. IV.

よくないからはじめは広めないで，用心した方がよいと意見を述べた[1]．そういう訳であったので，9月のロリス＝メリコフの談話はペレトツらに不安を与えた．

10月10日ペレトツは彼の書いた案をロリス＝メリコフに示し，談話が不安を与えたことを話した．彼はロリス＝メリコフに79年末から80年初における国家評議会改造案をめぐる会議の模様を話してきかせた上，大公からの委託を受けているのだが，この案実現の可能性はないかと単刀直入に尋ねた．彼はロリス＝メリコフが以前の経過を知っているのに気付いている．

「ロリスはいきこんでいった——私が立憲的な志向に反対したのはわが国では今はそれが不可能だからである．しかし，同時に私は事情に通じた実務的な人々の意見をきくことが必要だという考えにまったく賛成だ．私は一度ならずアバーザと話し合った．そうです．あなたの案を捨ててはいけません．役立つことがあるかもしれません．慎重に実際的にこれを行なうことを考えに考えることだけが必要なのです．」（強調—和田）

ペレトツは，大公はこの問題でロリス＝メリコフをぬきにしては何もしないだろう，ペテルブルクへ帰ってきたら，きっと彼と話し合うだろうと答えた[2]．

ロリス＝メリコフはコンスタンチン大公と皇太子の不仲を知っていた．おそらく彼がコンスタンチン派との接触を避け，皇太子と密着したのは，その逆を行なえば，事が一歩も進まないのを彼が知っていたためであったのだろう．だから，この時も彼は手の内を半分しか明かしていない．彼がいきこんだのはコンスタンチンに今出られては計画がつぶれてしまうからである．彼は「考えに考えよ」ということによってこの線をストップさせんとした．

この9月のジャーナリストへの談話を中心とした彼の動きは彼の立憲主義の問題について第2の論拠を与えるように思われる．

改革案提出の次の布石と考えられるのは12月22日の県知事あて回状である．この中でロリス＝メリコフは各県知事が県および郡ゼムストヴォ集会に農民問題について広く審議を行なうことを許可するように命じた[3]．この回状はゼムストヴォの現状改革の論議を湧き立たせることになった．

年が明けて，1月13日の日記にペレトツはコンタンチン大公とロリス＝メリコフの間に行なわれた話し合いの模様を次のように書いている．

「（ロリスは）この思想の実行をいかにうまく，慎重にやるかを忠告した．われわれの覚書に提案されたと同じ形でそれを提案することをロリスは恐れた．なぜなら，皇太子が前年以上ではないにしても，大公の案には反対だからである．このことを考慮して彼は国家評議会に何らかの常設機関をつくるのを提案するのではなく，ゼムストヴォと都市から編纂委員会へ代表を招集することを求める意図らしい．この編纂委員会が最高法院法官の監察が終った時に作成される立法案の予備的検討を行なう．おそらく，彼は正しいだろう．もっとも，これはわれわれによって提案されたものとはまるで違うが，しかし，いずれにせよ，一歩前進するのはしないよりもましだ[4]．」

10月には半分しか手の内を明かさなかったロリス＝メリコフはここにきてほぼ完全に

（1） Перетц, стр. 5.
（2） Перетц, стр. 8.
（3） Корнилов, указ. соч. стр. 232.
（4） Перетц, стр. 20-21.

手の内をコンスタンチン派に明かし，その支持を求めた．このことは改革案提出に踏切る条件がすでに整ったと彼が判断したためであろう．

改革案の成稿がいつできたかは不明である．ヘイフェッツはその下書と成稿を比較して推敲は「急進主義であり，立憲主義的原理の導入を志向するものであるという非難を一切排するために個々の主張を和げ，より一般的で，より不明確な説明を見出すという線[1]」に沿うものであったとしている．

そして1月20日前後ロリス＝メリコフはついに皇太子のもとに彼の改革案を送った．1月21日の皇太子のロリス＝メリコフあて書簡は次の通りである．

「今晩9時に私のところに覚書のことで話し合うために来ませんか．私は大いなる興味をもって読みました．しかし，多くの点で話し合わなければなりません[2]．」

話し合いの内容は知りうべくもない．しかし，ロリス＝メリコフが皇太子の不安と疑問を事実無根のものとして説得することに成功したのは動かないように思う．なぜなら審議過程で皇太子もこの案を支持しているからである．

そして改革案は1月28日皇帝のもとに提出された．

以上の分析からいえることは，改革案の内容はどの線までなら皇帝，皇太子がのむかという観点で決定されており，その提出までには種々の準備工作がなされたことである．さらにこの過程でのロリス＝メリコフの言行からして彼が立憲制を原理的に承認していることもほぼ確証された．

このような事実に照らしてみる時，改革案報告はわれわれに何を語り，いかなる歴史的意義を有するのであろうか．

4

この案を作成したロリス＝メリコフと彼の協力者の意図はいかなる論理となって改革案報告を貫いているだろうか．

導入部で述べられているのは，穏健な人々と緊密に同盟して，改革事業を不断に推進するという彼の政策の基本路線である．それは「国家改革の大事業の完成のために全力を尽して陛下にご奉仕する」という「公衆」の「忠誠な心構え」を「利用」して，「改革の完成と当面日程に上っている諸問題の解決」を計るという皇帝向けの言葉で表現されている．これはすでに前年4月11日の報告でほぼ承認済みの考えである．これが前提をなす．

それを具体化する手掛かりとして前年9月にはじめられた最高法院法官による監察がもち出される．その集める資料を無為に放置させるのか．それは不可能である．直ちに検討に入るべきである．布石はかように効いている．

ついでその資料の検討のさいに不可欠のこととして，「現在必要とされる施策の立案に公衆の参加を呼びかける」という思想が導かれる．これは原理的なものとして出されている．原理としての「公衆」の政治参与は唯一者の特殊意志の支配たる専制 самодер-

(1) Хейфец, указ. соч. стр. 198.
(2) Переписка. № 39. стр. 40.

жавие の制限・否定に通じるものである.

そのような原理的な思想を主張しておいて，その「思想実現の方法」,「形態」として西欧立憲制とゼムスキー・サボールがきわめて強く否定される．つまり，立憲制はここでは思想としては否定されていないことを忘れてはならない．「方法」として否定される時，その調子が強いのは，先にもみた通り，つづいて提案される改革に対して立憲制だという攻撃を外らすためである.

とりうる「思想実現の方法」として提案される改革は三段構成になっていた．第一段は前年4月11日の報告で皇帝および皇太子の承認を察知した「事情に通じた穏健な人々の招集という原則で構成される「準備委員会」である．これを第1段として，次には県ゼムストヴォ，都市自治体から選出された代表よりなる「一般委員会」が第2段に置かれる．第1段を承認する皇帝と皇太子に対し，第2段を第1段と結びつけることによっ承認させようとの意図であろう.

第3段は国家評議会改造の案だが，それがきわめて弱々しく，曖昧に書かれているのは，これに対する皇帝，皇太子の反対が知られているからである．つまり，拒否されれば，それだけ切り離して落せるように，あわよくばそれも認めさせようというのがロリスの腹なのであった.

以上のように，この改革案報告は，公衆の政治参与の思想を原理的に提示して，その実現の方法として，皇帝，皇太子の心理的抵抗が少い順に重層的に積み上げた三段階の臨時的な政治制度を提案したものである.

では，この改革はいかなる意義をもつものと評価しうるか．諸家の意見を聞こう.

この政革が俗に「ロリス＝メリコフの憲法」とよばれるようになったのは，そういう名前のパンフレットが，1893年に出されたためであるが，その筆者[1]も提案される内容が立憲制ではないことは知っていた．彼はこの案を「教養ある諸階層を官僚制と絶対主義に協調させようとしたつつましい試み」,「ロシア国民の平和的発展と1861年2月19日令を端緒とする諸改革の完成への唯一の道」と評価した[2].

1915年にコルニーロフはその『19世紀ロシア史講義』第3巻で次のような評価を与えた.

「この案にはいかなるものにせよ，立憲制度 конституционное устройство と共通なものは何もないことはご覧の通りである．この故に，この案が文献の上でロリス＝メリコフの憲法とよばれるのはまったく正しくない．……（ロリス＝メリフフの）案はその性格からして極度につつましいものであった．しかし，いずれにせよ，これが公衆と政府との正しい意見交換を確立せんとする当時としてはきわめて重要な試みであったこと，そして，これはおそらく может-быть 結局は一定の代議制，代議形態の形成にいたらしめ，そして，それはおそらく может-быть その結果として平和的な手段でロシアに……立憲制を与えたろうということは否定できない[3].」

彼にいわせれば，これが実現されていれば1905年に「住民をできるかぎり有機的に準

（1） 筆者はコヴァレフスキー М. М. Ковалевский であったとの説がある。«Былое», 1918, № 4-5, стр. 187.
（2） Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 65.
（3） Корнилов, указ. соч. стр. 237.

備することなく，革命的な道によって」立憲制が実現されるということもなかったろうということである．

さらにゴリーツィン公爵も，この改革案の「枠組は現在のわれわれには驚くほどにつつましいものに見える」といいながら，これを「憲法への憶病な一歩」，「ツァーリズムの崩壊をまねくに至る権力と国民との衝突を平和的に解決する……最後の可能性」とよんでいる[1]．ロリス＝メリコフの改革案が実現されていれば，十月革命もなかったろうとこの公爵はいいたいのである．

これらの意見はいずれも「つつましい」内容という事実の確認から立憲制の一歩という評価の間を「おそらく может-быть」という主観的願望でつないでいるのが，特徴的である．

これに対し今日のソヴェト史家は次のようなレーニンの「ゼムストヴォの迫害者たちと自由主義のハンニバルたち」の一節を引用する．

「われわれとしてはロリス＝メリコフの案の実現は一定の条件の下では憲法の一歩となりえたかもしれぬし，またそうなりえなかったかもしれぬと認める．すべては革命党とリベラルな公衆の圧力かそれとも専制の不屈の支持者たちのきわめて強力で，団結強固な，手段を選ばない一派の反抗か，どちらが力をますかということにかかっていた[2]．」

不完全な典拠によりながらも，レーニンの評価は鋭く歴史的である．今日のソヴェト史家がこの評価を実証的に深め，発展させることなく，単に引用することで能事了れりとしているのは不面目なことである．

では，われわれの評価はいかなるものであるべきか．この改革案が先行する一連の政治制度改革案と比し，もっともつつましい内容のものであることは間違いない．しかし，この改革案の主唱者ロリス＝メリコフは自由主義者であって，立憲制を原理的に肯定する考えの持主である．そして，彼は改革実現のために，まず大臣人事によって自らの立場を強化した．そして，この問題に対する皇帝，皇太子の意見を知ると，彼らの承認する線から出発し，改革を実現せんとし，皇帝たちがそれを拒みえないよう種々の準備工作を行なって，改革案を提出した．先行する政治制度改革企図においてまったく見られなかったこのような改革主唱者の思想と行動よりすれば，この改革企図の意義はもっとも大きいのである．

ロリス＝メリコフがこの改革案自体を究極的目標と考えていないことは明らかである．いかなる立憲制へいつ，どのようにして，到達するのかを彼が考えていたかどうかは不明であるとしても，さらに進んだ政治制度改革への階梯として出されたこの改革案が立憲制の方向へ向う第一歩として構想されていたとはいえるのではなかろうか．

しかし，それは主観的モチーフとして存在するにすぎないのであって，このつつましい改革が歴史の中で立憲制の一歩としての意義をもちうるためには歴史的な条件が必要である．ロリス＝メリコフはさしあたり皇帝，皇太子を攻略することに全精力を集中してきた．

大臣たちの中には強力な保守派はいなくなったものの，国家評議会や宮廷内部に専制

(1) Голицын, указ. соч. стр. 127, 129-130.
(2) В. И. Ленин, Гопители земства и Аннибалы либерализма. Соч. т. 5. стр. 39.

護持の勢力が厳として存在することは当然彼の知るところであったろう．ポベドノスツェフの立場もどういうものかはわかっていたろう．それだけに彼は皇太子の支持と皇帝の承認を得ることに急であったのだが，しかし，性格の弱い皇帝と頭の単純な皇太子は常に動揺しやすい存在である．彼の改革案がこれから皇帝の承認を得たとしても，事が明るみに出て，彼がこの線をさらに押し進めようとすれば，専制絶対護持の勢力が反撃に出て，皇帝，皇太子に働きかけることは必至である．その時，ロリスがその反撃をはねかえし，皇帝，皇太子の動揺を封じることができるための条件は国内の政治情勢の一層の尖鋭化以外にないのである．

またこの案が実現された場合，一般委員会に集まったゼムストヴォ，都市の代表が急進化し，ロリス＝メリコフを通り過ぎて，前進する可能性を考えるためにも，国内の政治情勢の一層の尖鋭化が必要な条件となるのである．

以上述べたことをまとめれば，ロリス＝メリコフの改革案はきわめて内容の小さな改革案ではあるが，その主唱者の主観的意図としては立憲制への第一歩であって，国内政治情勢の一層の尖鋭化という条件があれば，歴史的，客観的にそのような意義をもちえたろうということになる．

第3章　改革案の審議過程

1

皇帝アレクサンドル二世が当時いかなる心境でいたかを知る史料はほとんど知られていない．ただ前年11月9日彼が皇太子にあてた書簡が彼の心境の一端を伝えている．彼は病める皇后マリア・アレクサンドロヴナが5月22日に死んだのち，側近の諫めを押して，7月6日愛人のドルゴルーコヴァ E. M. Долгорукова といわゆる左手結婚を行なった．皇太子はユリエフスカヤ大公女 Юрьевская となった父の愛人を嫌っていた．
その皇太子に皇帝は次のように書いた．

「親愛なるサーシャ　私が死んだら，私の妻と子供をお前に託す．彼らと知り合った最初の日からお前が変わらぬ友情を示してくれていることは，私にとって，お前が彼らを見捨てることなく，庇護し，良き助言者になってくれるだろうということの保証だ．（中略）これは私の最後の希望だ．お前が忠実にこれを果してくれるだろうことを私は信じている[1]．」

63歳の老いた皇帝は死期の遠くないことを予感しているかのようである．革命党のテロルはたしかに彼を疲れさせていた．

ロリス＝メリコフの晩年の書簡によれば，彼が改革案を提出したさい，皇帝は厳しく次のようにいったという．「お前は私に何を提案するのかよく考えたのか？これは États generaux ではないか[2]．」

頭の単純な皇太子よりは西洋史の素養のある皇帝は単なる国王の諮問機関がフランス革命前夜にいかなる役割を果したかを知っていた．また，ルロワ＝ボリエは皇帝がこの改革案の審議に入ってから大臣たちに次のようにいったと述べている．

（1）　Перетц, примечание. стр. 159-160.
（2）　Хейфец, указ. соч. стр. 202

「われわれに提案されているのはルイ16世の Assemblé des notables（名士会）に他ならぬ．その結果を忘れないでほしい．……しかし，それにもかかわらず，諸君らがこれが国のために有益だと思うなら，反対はしない[1]．」

この通りの言葉がどの席で吐かられたのかを詮索することはできないが，皇帝の気分はこれらの言葉に明らかである．裏付ける事実はのちにも出てくるが，皇帝は直観的にロリス＝メリコフの道に憲法への道をみた．しかし，だからといって，そんなことはないと否定して，この改革の不可避性を説くロリス＝メリコフの言葉をさえ切って，この案を拒む論理と力は彼にはすでになかったのである．

ゴリーツィンが発表した改革案の覚書には２カ所に鉛筆での消去があり，疑問符がついている．１カ所は一般委員会への代表選出のさい県ゼムストヴォ評議員，市会議員でなくともよいとした箇所であり，他の１箇所は国家評議会改造の提案の箇所である[2]．皇帝はこの２点に反撥した．前者はともかく，後者について皇帝がこういう態度に出るのはロリス＝メリコフとしては計算済みのことであった．のちの特別審議会議事報告からうかがえるように，前者は提案に残され，後者は落されている．ロリス＝メリコフはそういうふうに提案を改めると皇帝に答えたのであろう．

皇帝は「三部会」ではないかといった翌日には，改革案に承認を与えたとロリス＝メリコフの先の書簡は述べている．

割り切れぬ気持を残しながらも，皇帝は承認を与え，皇太子，コンスタンチン大公，ヴァルーエフ，ウルーソフ，宮内大臣アドレルベルク A. B. Адлерберг，アバーザ，ナボコフ，ロリス＝メリコフの８名を招いて２月４日に審議を行なうことが決定された．

皇帝，皇太子が承認を与え，コンスタンチン大公の支持は取り付けてあり，ナボコフにも問題はない．アバーザは協力者である．とすれば問題は官僚的中間派の３名にある．２月２日ロリス＝メリコフは彼の覚書のコピーを添え，４日の会議への出席を求める書簡[3]をヴァルーエフに送った．そして翌日自らヴァルーエフのもとを訪れた．

ヴァルーエフはこの日の日記にロリスが「とても愛想がよかった」と書き，改革案については次のように酷評している．現実政治家たりえない官僚的政治批評の言である．

「知的，精神的衝動性のモニュメント．ナイーヴで，シニカルな自画自讃，皇帝に対する不快な追従，それにいろいろな嘘の不快な陳述――招集された専門家よりなる編纂委員会という古い考え[4]．」

２月４日皇帝臨席の下に先のメンバーでの会議が開かれた．翌日のヴァルーエフの日記にその模様をみよう．

「昨夜皇帝のところで会議．……ロリス＝メリコフ伯御自ら彼の覚書を読み上げた．それから審議が行なわれた，昨夜は qui donc trompe-t-on ici ?（なぜこのさい急ぐのか）と自問せざるをえなかった．答はあらかじめ出ていた．……「念を入れた措置」，「細部」云々などのいつもながらの不明確な留保を付けてみんなが内相の提案を承認し，皇帝をのぞく同じメンバーで私が議長をつとめる会議を開き，この細部を検討し，この念を入れた措置を確定することを委せられて，話がついた[5]．」

（1） A. Leroy-Beaulieu, L'empire des tsars et les Russes. tome II. Paris, 1893, p. 610.
（2） Материалы. № 2. p. 165. примечание.
（3） Там же. № 3. стр. 167.
（4） Валуев, стр. 142.
（5） Валуев, стр. 142-143.

出席者の動きはどうであったか.

「会議のさい海軍大将（コスンタンチン大公のこと）とアバーザは無作法なまでにロリス＝メリコフ伯にお世辞を使い，それは当然皇帝の儀礼的な謝辞となり，それから伯爵……が陛下の手にキッスすることになった[1].」

ヴァルーエフの嫉妬が多少誇大化している面があるとしても，コンスタンチンとアバーザの調子のよさは彼らがタクトを十分に心得ていないことを示している．しかし,「答が出ている」この会議では反対に立つものはなく，ヴァルーエフもこの案と過去の自分の案の一致点を述べ，ただ予期される結果が異なっていると付け足したに留まった.

ロリス＝メリコフはヴァルーエフにソリスキーを加えてはどうかと提案し，これは実現され，彼の立場はますます強いものになった[2].

ヴァルーエフ主宰の会議は2月9日と定められたが，その前日ロリス＝メリコフは再度ヴァルーエフを訪れた．彼にはヴァルーエフが大層気になったのである．ヴァルーエフはこの日の日記に「彼の言葉にはどこまでの意義があるのか，あるいはどこまで真実があるのかはきわめてはかりがたい[3]」と書いている.

翌日皇太子のもとで第1回の会議が開かれた．ヴァルーエフはコンスタンチンのロリスに対する追従が前回より一段とひどいとしている.

「その他の点では会議はみじめなものであったが，腹立たしくはなかった．一切の理性的な審議は不可能であった．枠組，概念，公式……すべてが決められていた．真理はビタ一文もない[4].」

2月14日には最後の会議が開かれ，ソリスキーの作成した議事報告書 журнал の検討が行なわれた．またヴァルーエフによろう.

「彼（＝ロリス＝メリコフ）によって企だてられたことはすべて自分の商号で公表するために企だてられた．だから昨日も彼は特に公表を主張した．愚かではないが，ナイーヴなソリスキーはお人好しにも自分の考えの空しさに気づかず反対した．ウルーソフ公とアドレルベルク伯もどこかつまもうとしたが，これは勿論空しく，彼らは何もつまめなかった[5].」

ロリス＝メリコフが公表を急ぐのは，保守派の反撃を考えるためであろう．ロリス＝メリコフへの嫉妬に満ちた2回の会議についてのヴァルーエフの記述の中に皇太子が一度も出てこないのは，何を意味しているのであろう．この案を承認はしたものの，不仲の叔父がロリス＝メリコフをもち上げるのを見て，やや不安を感じはじめて沈黙しているということであろうか.

特別審議会議事報告書は2月16日全員の署名をえて，皇帝のもとに提出された．報告書[6]はまずロリス＝メリコフの提案を要約している．先に述べた皇帝の反対から国家評議会改造を提案した部分は落ちている．ついで，会議は最近一年間に行なわれた施策の

（1） Там же. стр. 143.
（2） Там же. стр. 143. ロリス＝メリコフのソリスキーあての出席依頼状は Материалы. № 4. стр. 167.
（3） Валуев, стр. 143.
（4） Там же. стр. 144.
（5） Там же. стр. 145.
（6） Материалы. № 5. стр. 167-173.

効果についてのロリス＝メリコフの見解に「まったく同意し」,「皇帝陛下の御構想になられた改造事業を発展させ，改善することにより，政府と公衆のよき勢力との有益な関係を強化するという現在とるべき道についての彼の思想に賛成する」と述べられている.「したがって，会議は全体として内相の提案を承認する.」

それから会議で出た意見を述べている．主として，それは「一般委員会」についてであって，その「構成，招集，行動方式」は「もっとも細心な審議と詳細な規定を要求する」が,「事の多くの側面は一般委員会の招集に先行すべき準備行動の遂行にしたがって完全に明らかになる」のであるから，さしあたり「この問題についてはもっとも主要なテーゼのみを確認するに留める」としている.

そうはいうものの問題になったのは枝葉末節の類である.

問題になった点というのは 1）準備委員会の数， 2）準備委員会メンバーの一般委員会の横すべり， 3）一般委員会への代表の数， 4）辺境の代表の問題， 5）一般委員会の会期の５点である．最後にこの５点を除いたロリス＝メリコフ提案12項目にも要約し，皇帝の承認を求めている.

この議事報告書の上に皇帝は２月17日，“Исполнить”と書いた[1]．これによって改革案は決定されたと考えられる．皇帝はこの決定を公示するための文案を作成するようロリス＝メリコフに命じた[2].

この公示文案 проект сообщения が何日までに作成され，何日に皇帝のもとに提出されたかは不明である．しかし，この日から皇帝が文案を承認する宿命的な３月１日までの12日間という時間は重要な意義をもつことになった.

公示文案は前文と議事報告書で要約された12項目の改革内容とよりなっている[3]．前文ではロリス＝メリコフの覚書の当該部分を硬い言葉で要約しているが，問題にした「現在必要とされる施策の立案に公衆の参加をよびかける」という部分は「陛下の御構想になられた改造事業を発展させ，改善するために，陛下が当面解決の要を認められる諸問題に関して中央機関が法律案を準備するのに地方代表を諮問に与るものとして参加させる」(стр. 175）と表現されている.

2

1881年３月１日は日曜日であったが，それはツァーリズムにとっても，ロリス＝メリコフにとっても，暗い日曜日となった．ヴァルーエフは翌日の日記にこの日のことを次のように書きおこしている.

「午前中皇帝は私をよばれた．内務省で作成された公示文案を渡し，それについて私の意見を求め，私に異論がなければ，４日の水曜日に大臣評議会 совет министров を招集することを依頼するためであった．私は永いこと，随分永いこと，あのように上機嫌で，あのように健康そうな，やさしい顔付きの皇帝を見たことがなかった[4].」

(1) Там же. стр. 167.
(2) このことは３月６日の第２次公示文案にある．Там же. № 9. стр. 179.
(3) Материалы. № 6. стр. 173-177.
(4) Валуев, стр. 147.

ヴァルーエフは退出し，自宅で文案を検討して，文案は「きわめてよくできている」，大臣評議会招集の手続をとったという覚書を付して，文案を皇帝のもとに返えした[1]．

12時半にロリス＝メリコフは参内し，皇帝から文案とヴァルーエフの覚書を受け取った[2]．皇帝はミハイロフスキー練兵場における衛兵上番の観閲に外出するのを毎日曜日の日課としていた．危険を感じさせる事実があるとして，ロリス＝メリコフは前日に以後4日間の外出取り止めを進言していた．この時も彼はそれを繰り返えしたが，皇帝はきかなかった[3]．退出して行くロリス＝メリコフを見送って皇帝はその場に居合わせた皇太子とヴラヂーミル大公に向って，「私はこの提案に同意を与えた．もっともこれが憲法に至る道であることをよく承知しているが」と語った[4]．

あらゆる政治制度の改革が立憲制につながることを皇帝は恐れてきた．しかし，度重なる革命党のテロルに彼の心は追いつめられ，情勢打開のために異例の抜擢を行なって権力の座につけたロリス＝メリコフの巧みな工作によって，彼はそれが立憲制への道であるとの意識はありながら，改革案に承認を与えざるをえなくなったのであった．その公示文案にまで承認を与えたこの日の皇帝の心を横切るものは，ついにロリス＝メリコフにしてやられたかという苦笑と治世の後半の長い動揺の連続のあとでともかくも一つの決断を下しえた安堵の感情であったのではないか．

そして，彼はロリス＝メリコフの警告をあえて無視して冬宮をあとにした．衛兵上番の観閲をすませ，近くのミハイロフスキー宮の妹エカテリナ・ミハイロヴナを訪れた皇帝の馬車は帰途エカテリナ運河沿いの道を進んだ．午後1時45分馬車がコニューシェンヌイ橋の手前まで来た時，運河の手すりにもたれていた青年が馬車めがけて爆弾を投げた．爆弾は轟音とともに爆発し，馬車を大破させ，3人を殺したが，皇帝は無事であった．彼は馬車から出ると，「犯人はつかまったか」と尋ねた．青年は取りおさえられていた．「やれやれ，私は助かった」——皇帝はいった．件の青年がいう．「やれやれかどうか，まだわからない．」皇帝はきびすを返えして，随員の橇に向う．そこにいま一人の男が近付き，二，三歩の間隔にせまったとみるや，足もとに爆弾を投下した．この爆発によって，皇帝は致命的な重傷を負ったのである[5]．

この瞬間われわれの大臣はどこにいたか．再びヴァルーエフに戻ろう．

「私はロリス＝メリコフ伯の家にいた．（私が何の論評も加えずに文案を皇帝に返えしたことを知らせておいてやろうと思ったのである）——その時，あの宿命的な爆音が続いて轟いた．私はいった——attentat possible．そんな馬鹿な невозможно ——ロリス＝メリコフ伯がいった．5分後一切の疑いははれた．ロリス＝メリコフ伯は警視総監の橇で宮殿へ向かった．私も……宮殿へ赴いた．着くとすぐもはや望みのないことを知らされた[6]．」

（1） Материалы. № 7. стр. 177.
（2） 3月6日のロリス＝メリコフの新帝あての覚書に述べられている．Материалы, № 8. стр. 177.
（3） 3月3日にロリス＝メリコフがミリューチンに語っている．Милютин, т. 4. стр. 28.
（4） 4月28日の大臣会議でヴラジーミル大公が語っている．Там же., стр. 62.
（5） 叙述は以下による．Памяти Гринебицкого. «Былое», вып. 1 (1900-1902 гг.), Ростов-на-Дону, 1906. стр. 11-12. В. Я. Богучарский 1-е марта-3-е апреля 1881 года. «Былое», 1906, № 3, стр. 1-11.
（6） Валуев, стр. 147.

同じ時かけつけた陸相ミリューチンは次のように書いている.

「皇帝の生命をのばそうとあらゆる努力が払われたが，そのかいなく，3時35分呼吸は完全に止まった．司祭長バジャノフ В. Б. Бажанов は辛うじて間に合い，死者に聖餐を与え，臨終の祈禱を上げた．居合わせたわれわれはみな死の床のまわりに膝まづき，それから亡骸を次の間へ移した[1]．」

悲しげな面持でミリューチンが彼の愛した皇帝の遺体をかついでいる時，ヴァルーエフの鋭い目は別のところに向けられていた．

「廊下はいろいろな人々——将軍や大臣，士官それに婦人たちで一杯であった．狼狽と悲嘆とがみなの心をとらえていた．しかし，明晰な考えと状況に相応した意志は誰にもみられなかった．ロリス＝メリコフ伯は外見は呆然としているようでもなかったが，内面は空であった．彼が指揮をとらなければならないのに，まるで無感情で，心をきめかねるかのように，私にまで相談して，それどころか私の示唆にさえ従って，指揮するありさまであった．」

舞台裏の駆引ではあざやかなところを見せてきたロリス＝メリコフも決定的瞬間の頭の回転では老官僚ヴァルーエフにおくれをとった．しかし，彼には放心の理由は十分あるのである．

「最初の瞬間，街頭の騒擾が予想された．秩序を守るために軍隊に依拠することが必要であった．私はそのことを主張した．しかし，まるで司令官も参謀たちもいないかのごとくであった．」

ツァーリ暗殺に続く民衆騒擾——権力の一番恐れていたことはこれだった．

「幸いなことにこの点ではすべて無事であった．街路は夜の10時までは人で一杯であったが，それから人気が絶えた．私は11時にマニフェスト（新帝即位の宣言．3月2日に出た）の文案をもってアニチコフ宮へ赴いたが，ネフスキー大通りはいつものこの時間のネフスキーと同じであった[2]．」

かくて宿命的な3月1日が終った．午前中は公示文案の承認が得られたのに，午後には皇帝が暗殺され，皇太子が新帝となった．ロリス＝メリコフが放心したのはこれによって彼が積上げてきた工作の全体がトランプの家のようにあさなくつぶれてしまったからである．彼が「再び悪しき狙撃がなされたとして見給え．私は破滅する．私と一緒に私の体制も破滅だ．『新風 новые веяния』から……再び宗教裁判同様のものに吾々は移ることになるのだ[3]」とペレトツに語ったのは，すぐる年の暮のことであった．彼は直ちに辞職を考えた．3月1日中に早くも新帝アレクサンドル三世に後継者を考えてくれるように求めている．新帝は彼を信任していると答えた．翌2日彼は再度，状況が変ったこと，なき皇帝の生命を守れなかったことを指摘し，辞職を願った．「一体他の誰がこの不幸を防ぎえたというのか——そんなことをいわずに，報告をしてほしい」と新帝はいった[4]．

いま一人，新帝と不仲のコンスタンチン大公も自分のポストを心配していた[5]．

一方，これまで鳴りをひそめていた反ロリス＝メリコフの保守派の動きは活発化する．その中心になったのは新帝の師ポベドノスツェフであった．この時まで先年より永らく彼は皇太子を自らの政治的影響下に置くことはできなかった．宗務院総監にはなっ

（1） Милютин, т, 4, стр. 25.
（2） Валуев, стр. 148.
（3） Перетц, стр. 14-15.
（4） Там же. стр. 29.
（5） Там же. стр. 28.

たものの，大臣委員会には出席できない身であったので，彼はほとんど動きを示さなかった．ロリス＝メリコフの改革案については，彼は完全につんぼ桟敷に置かれていった．皇太子ですら彼の意見を求めず，ロリス＝メリコフにポベドノスツェフにも伝えるようにというだけで自分では知られてくれなかったのである．おそらく皇帝の死はロリス＝メリコフの改革案審議のことが広く知れわたる契機になったのであろう．彼は3月3日のチュチェヴァあて書簡にその事への不満を述べ，次のように書いている．

「ああ，私には新帝が気の毒でならない．哀われな，病気の，甘やかされた子供のように不憫だ．誰が彼を導いていくのか？　さしあたりは元通り手品師のロリス＝メリコフだ．あらゆる徴候からみて，今ロリス＝メリコフは新帝をがんじがらめにしている[1]．」

いかにして新帝をロリス＝メリコフの手から奪い返えすか．彼は注意深く計算された手紙をつぎつぎに送った．3月3日に彼が皇帝に送った書簡は二つ知られている．第1の書簡は一般的なものであって，その中心的な主張は次の部分である．

「どうか陛下にとって決定的に重要なものとなるでありましょうご治世のこの最初の日々において，機会をとらえて決然たるご意志をお示しになられますように，大臣に陛下がかく望まれかかることをお望みにならず，お許しにならぬということを衆知させるのです」．

何を許さないかという内容については，彼はこの書簡では語るのを差し控え，ロリス＝メリコフにはふれず，ただ末尾に共同の敵コンスタンチン大公のことに言及するにとどめている[2]．いま一つの書簡はアレクサンドル二世の遭難地点に礼拝堂を立てよという提案で，次のように述べて，皇帝の保守的スラヴ主義に訴えた．

「まわりでは呪われたるペテルブルクのインテリゲンツィアをしてその狂気の声音をあげて騒がしめましょう．しかし礼拝堂の中にはロシア人の心のための聖なる静けさがあるでありましょう[3]」

ポベドノスツェフが手紙で新帝を攻め立てていることをロリス＝メリコフは直ちにキャッチした．その話をこの3日に彼から聞いたミリューチンは「ロリス＝メリコフ伯はそのツァーリの助言者の有害な影響をとても懸念していた[4]」と書いている．第1の投弾者はすでに自白をはじめ，それに基き，前夜テレージナヤ街のアジトの捜索が行なわれ，1人は自殺したが，2人が捕えられた．また2月27日に逮捕されていた2名の者のうちの1名が自ら暗殺の「主要な組織者の1人」であると名乗り出た．ロリス＝メリコフはこれらのこともミリューチンに語った[5]．警察はかくのごとく成果を上げつつあったが，なお第2の皇帝暗殺は懸念される事態であった．この日またロリス＝メリコフはヴァルーエフの勧めで新帝に皇太子若年故，不慮のさいの摂政をお決め下さるようにと進言している[6]．彼はこのような状況が落着かぬうちに，ポベドノスツェフを先頭にする反対派が新帝をつかまないうちに，彼の改革案の可能性を試めすことを決心した．

3月6日彼は新しい公示文案を添えて，皇帝に覚書を送り，4日に予定されていた大

（1） цит. Готье, указ. соч. стр. 259,
（2） цит. Готье, указ. соч. стр. 260. 草稿は Novum Regnum. № 23. стр. 45-46.
（3） Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 33.
（4） Милютин, т. 4. стр. 28.
（5） Там же. стр. 28. また Богучарский, указ. соч. стр. 2.
（6） Милютин, т. 4. стр. 28.

臣評議会をいつ開けるかと問うた[1]．ゴーチエは皇帝の支持を信じて疑わなかったので，かかる大胆な行為に出たというが[2]，まさにその逆であろう．信じていれば，大葬もすまない前に何もかかる冒険に出ることはなかったはずである．

この新しい文案では政策の一応の成功を述べた部分をけずり，結びのところに3月1日における前帝の決定を述べ，次のように書いている．

「皇帝アレクサンドル三世は父祖の遺訓たる国民の幸せへの愛に満ちて，薨去されたる忘れがたき父君により示された道を断乎として進まんとの大いなるご決意を示し給うた[3]．」

ロリス＝メリコフは死んだ父に対する子の義務ということで新帝の動揺を縛ろうとしたのである．

この文案に対して皇帝は「覚書はきわめてよく書かれている」，さらに「大臣評議会の招集についてはあなたと話し合おう」と書いた[4]．

しかし，この日皇帝のもとに決意を迫ったのはロリス＝メリコフだけではなかった．ポベドノスツェフもこの日皇帝に向けて第二弾を放った．この手紙では徹頭徹尾，何の手加減もなしにロリス＝メリコフへ攻撃が加えられている．

「もしも……リベラルな方針を取り続けなければならぬ，いわゆる公論を満足させねばならぬと従前通りのサイレンの歌を聞かされも，どうか陛下，それを信じないで下さい．耳をお貸しにならないで下さい．これは破滅であります．ロシアの破滅であり，陛下の破滅であります．……陛下の安全はこのことでは守れません．……陛下の父君を殺した狂人どもはいかなる譲歩にも満足せず，ただ荒れ狂うばかりです．……悪しき種子はただ彼らとの生死をかけた，鉄と血による闘争によってはじめて根絶しうるのです．」

勝利は難事ではない，これまでは「しおれたトルコの宦官と手品師たち」が闘争を避けてきたのだ．トルコの宦官，手品師——いずれもロリス＝メリコフを指している．そして公然という．

「ロリス＝メリコフ伯を留めてはなりません．私は彼を信用しません．彼は手品師で二重のゲームをやることができます．もしも陛下が彼の手に身を委ねられるなら，彼は陛下とロシアを破滅に至らせます．彼はただリベラルな案を実行することができるだけで，内部陰謀をやってきました．しかし，国家的な意味では彼は自身何を望むのかわかっていません．……彼はロシアの愛国者ではありません[5]．」（強調—和田）

皇帝の返事はこの日のうちに出た．

「心のこもった手紙を本当に感謝する．まったく同意見だ．明日3時私のところへ来てほしい．私は喜んであなたと話し合う[6]．」

皇帝アレクサンドル三世はついにその旧師の手に戻ったのである．この一週間の彼の心境を知る史料は知られていない．しかし，いろいろなことから次のように想定することはさして誤りではないと思われる．

父の横死と心の準備を整える暇もなく背負わされた帝位の重みに彼が当初「おそろし

（1） Материалы. № 8, стр. 177.
（2） Готье, указ. соч. стр. 264.
（3） Материалы. № 9, стр. 177-180.
（4） Там же. № 8. стр. 177.
（5） цит. Готье, указ. соч. стр. 261.
（6） Novum Regnum. № 18. стр. 44.

く動揺していた」のは何人かの人によって観察されている[1]．それは無理からぬことであった．辞職を申し出たロリス＝メリコフを慰留したのは反射的な行為であったろう．しかし，日が移って，当座の興奮が冷めていくと，皇帝として何をなすべきかという問題が彼の前に提起される．強い意志をもてとポベドノスツェフはいってきた．彼は1880年２月冬宮爆破という大事件のあとで登場したロリス＝メリコフに全幅の信をおいてその政策に期待をかけた．それから約一カ年間，当初ほどの熱狂はなくなったけれども，相変らずロリス＝メリコフを信任して，その言葉を信じて，改革案にも支持を与えた．しかし，それだのに父の無残な死．思えば，元気な父を見た最後の時，父は何といったか．「もっともこれが憲法に至る道であることをよく承知しているが」といったのである．この改革案審議の時に嫌いな叔父コンスタンチンの見せたロリス＝メリコフに対する露骨な好意も思い出されたろう．しかし，だからといって，ロリス＝メリコフとその路線以外に彼の帝国のこの危機を打開しうる人と政策はあるのだろうか．単純な彼の頭にはあまる大問題であった．彼はなおも混乱を続け，何か強いもの，頼れるものを求めた．

ロリス＝メリコフが大臣評議会の開催を求めた覚書を私はポベドノスツェフの書簡より早く届いたものと考える．その方が自然である．皇帝はこの覚書を受けとった時，それに一応の賛意を評した．拒むだけの明確なものが彼にはなかったのである．そして，そこへポベドノスツェフの書簡．そこには力強い言葉があった．「しおれたトルコの宦官」が斥けられ，「鉄と血による闘争」が主張されていた．そして，ロリス＝メリコフは「二重のゲーム」をやっていると書かれていた．自分は彼に欺かれていたのか．スペランスキー以来改革者に浴びせられる専制護持派のきまり文句，非愛国者という非難がこのアルメニア人の改革者の場合，実によくきいた．

かくて皇帝サレクサンドル三世はポベドノスツェフの手を取るに至ったのである．しかし，それは多分に感情的なものであったことは間違いない．

３月７日皇帝はポベドノスツェフと話し合った．そこで何が話されたかは不明である．しかし，ロリス＝メリコフの大臣評議会開催提案が問題になったことはほぼ間違いなかろう．この日ヴァルーエフに明８日大臣評議会を招集せよとの命令が発せられているが[2]，それはこの会談の結論と考えるのが自然である．二人は改革案を葬る作戦を練ったであろう．大臣評議会には正規のメンバーの他，ポベドノスツェフとストロガーノフを参加させることになった[3]．

3

３月８日午後２時15分冬宮真紅の間において皇帝主宰の大臣評議会が開会を宣せられた．出席するものは大臣委員会議長ヴァルーエフ，12省の大臣（外務のみ次官ギールス Н. К. Гирс），国家評議会議長コンスタンチン大公，国家評議会法律部会，経済部会の両議長ウルーソフ，バラノフ Э. Т. Баранов，国家評議会秘書官ペレトツ，大臣委員会秘書官マンスーロフ Н. П. Мансуров，皇帝直属官房第四課長官オリデンブルクスキー

(1) Милютин, т. 4. стр. 25. Перетц, стр. 24.
(2), (3) Валуев, стр. 151.

公，皇帝の叔父ミハイル，皇帝の弟ヴラヂーミルの両大公，宗務院総監ポベドノスツェフ，それにストロガーノフ伯爵であった．テーブルをはさんで皇帝の真正面に内相ロリス＝メリコフが着席し，偶然にもその左隣りはポベドノスツェフの席となった．

ヴァルーエフをして「一冊の本が書ける[1]」といわしめたこの会議についてはその議事録は存在しないが，四人の出席者がその模様を日記に書き，一人が書簡で，他の一人が口頭で語っている．中でもっとも詳細を極め，もっとも客観的と思われるのは「まるで写真にとったごとく正確であると自負する[2]」というペレトツのものである．以下の行論において会議の経過，発言を追うにあたり，このペレトツの記述を中心にすえる[3]ミリューチン，ヴァルーエフ，コンスタンチンの日記，ポベドノスツェフのチュチェヴァあての書簡（3月11日付）は密度の差はあれ，いずれもこれらの人々の発言の力点と他の人々の発言への反応を知るために利用される．3月12日にロリス＝メリコフがビリバーソフ B. A. Бильбасов を招いて語った談話をビリバーソフが日記に書き止めたものは以上の類の史料とはまったく性格を異にするもので，3月8日会議の史料というよりは3月12日時点でのロリス＝メリコフの政策の史料である．これはのちに検討する．

7日の夜にヴァルーエフの発した大臣評議会開催の通知にはどういう事情が議題が書かれていなかったので，出席者の大多数は冬宮の控えの間に来てはじめて，この日の議題を知った．ミリューチンもペレトツもそうであった[4]．このことはロリス＝メリコフの側の組織が十分整っていなかったことを意味する．これは少数ながら反対派の側はかなりよく打ち合わせてこの会議に臨んだのと際立った対照をなしている．控え室において見慣れぬストロガーノフを見て，ミリューチンはその出席の理由を察知しえないでいる[5]．

さて会議は皇帝の発言をもってはじまった．彼はこれまでの経過を説明して次のように述べた．

「本質的に草案と一致している議事報告書は陛下のもとに提出され，ご承認を得た．しかし，亡き皇帝は細部について若干の論評をお加えになった．今われわれの審議するのはこの論評である．しかし，まったく腹蔵なく，少しも遠慮することなく，諸君の意見を聞かせてほしい．問題はあらかじめ決定されたものとみるべきではない．というのは亡き父はこの案の最終的承認に先き立って，その検討のため大臣評議会を招集することを望まれたからである．このことをあらかじめ申し上げておく．」

ゴーチエはこの演説についてきわめて「正確な冒頭演説[6]」というが，誤りである．皇帝の演説は事実を曲げている，事実はわれわれのみたごとく，この時点で未決に残されていたのは，改革案の内容ではなく，改革を公表するための文案であったのである．皇帝は意図的に問題全体が未決定である点を強調した．このことはミリューチンを除いて，ヴァルーエフ，ポベドノスツェフ，コンスタンチンの3人の適確につかむところであった[7]．

（1） Валуев, стр. 151
（2） Перетц, стр. 46.
（3） Перетц, стр. 31-46. 以下註なき引用はすべてこれによる.
（4） Милютин, т. 4. стр. 32. Перетц, стр. 31.
（5） Милютин, т. 4. стр. 32. ミリューチンはこの時までに改革案の内容はロリスから聞いていた.
（6） Готье, указ. соч. стр. 263.
（7） «Красный архив», т. 8,1925. стр. 151. Валуев, стр. 151. Голицын, указ. соч. стр. 139.

ついで皇帝はロリス＝メリコフに特別審議会議事報告書と3月6日提出の公示文案を読み上げるように求めた．議事報告のはじめにはロリス＝メリコフ路線の成功を述べた箇所がある．ロリス＝メリコフがそこまで読むと，皇帝は「どうやらわれわれは思い違いをしていたらしい」と口をはさんだ．この点についてヴァルーエフは鋭くも，「ロリス＝メリコフ伯が議事報告書の朗読を許容し，しかも自分でそれを読み上げたのは私には不可解だ」，「最初の方の自画自讃の部分はわれわれの喪中の会議の席では致命的な印象を与えた[1]．」と述べている．

朗読が終わると，皇帝はストロガーノフに発言を求めた．さすがにミリューチンもここへきて，ストロガーノフが「ロリス＝メリコフによって行なわれている国家施策の仮装せる自由主義に対する反対派の権威ある代弁者として現われた[2]．」（強調—和田）ことに気付いた．

ストロガーノフは次のようにはじめた．

「この措置は……現下の情勢のもとでは時宜に適わぬというだけでなく，有害な措置であります．というのは，これを採択すると権力は……専制君主の手から……私利私欲のみを思うさまざまなのらくら者に移ってしまうためです．」

それから，ジャーナリズムの憲法論議にふれ，内相じきじき出版関係者を集めて自粛めを求められたそうですねとロリス＝メリコフに問いかけた．ロリスは明らかに受け大刀になって，その話は「まったく正しいというわけでもない」と弁解をさせられた．最後にストロガーノフは「この道は真直ぐに憲法に通じています．私は陛下のためにも，ロシアのためにも憲法を望みません」といって，発言を終えた．この発言によって，この会議は改革是非の原則論に完全に引き戻されることになった．

この発言に対して皇帝は「これが憲法への第1歩ではないかと私も恐れている」と論評し，ヴァルーエフへ発言をまわした．

ヴァルーエフはストロガーノフに原則的に反対した．

「提案されている措置は憲法とはほど遠いものです．これは極度に多彩なわが国とその住民の真の要求をわれわれペテルブルグに住む者よりよく知っている人々の意見と見解を聞くことを目的としております．」

こう述べてから，彼は自分はこの種の提案では「ヴェテラン」だとし，63年に国家評議会改造案を出して以来，「私はこの問題についてたえず同一の見解を守り続けてきました．……私は今も自分の信念を変えません．それどころか現在の状況の下では，提案された措置はとくに切迫しており，必要であると考えます」といった．

このように改革案を支持しながらも，この保身術にたけた官僚は結論では「この法律を今公布するのが時宜に適っているかどうか問題については意見を述べるのを差し控える，それは専ら皇帝のご意志によるべきだと逃げた．

彼は日記に「はっきりしたproffession de foiを行なうのは「きわめて不快で」あったが，そうする義務を感じたし，またその方が「安全である」（強調—和田）と思ったと書いている[3]．

（1） Валуев, стр. 151.
（2） Милютин, т. 4. стр. 33.
（3） Валуев, стр. 152.

ヴァルーエフのあとはミリューチンが発言した．彼は改革案を「完全に必要で，しかもまさに現在必要なのです」と明確に支持した．亡き帝の治世の初めの「一連の偉大な事業」はその後停滞した．「ロシアではすべてがブレーキをかけられ，凍りついてしまったかのごとくであり，うつろな不満は至るところで頭をもたげてきました．」近年は公衆の期待も高まり，改革の噂は国外へも広まった．

ミリューチンがこういうと，皇帝はカイザー・ヴィルヘルムはやりすぎると代表制まで行かなければならなくなると忠告してきたと反論した．これに対するミリューチンの反駁は典型的なものである．

「陛下，現在われわれにおいて論議しておりますのは憲法ではありません．そんなものは影も形も見えません．提案されておりますのは以前あったものを正しい基盤に立って整理することであります．」（強調—和田）

ミリューチンの次には先の内相，郵政大臣マーコフが発言し，提案の「基本思想は専制の制限であり」，これには絶対反対だとした．しかし，そのあとで，もっと落ちついた時には「権力の弱化と統治形態の改変」についても論議できるとした．どうやら官僚的中間派は，ヴァルーエフとマーコフとでは出発点が違うものの，いずれも折衷的である．

反対したマーコフのあと，ロリス＝メリコフの協力者，蔵相アバーザが立った．彼は「若干激して」マーコフの意見を反駁した．しかし，この反駁は論理が乱れて，無力であった．彼はまずマーコフの現状では不可能だという主張を反駁し，「現在の騒乱は自分たちの皇帝への愛と忠誠心とに満ちている国民とは何ら共通のものをもたぬ悪漢の一味によって引きおこされた」のだから，公衆と民衆への不信は無用で，「強くて活動的な話のわかる警察」が必要なのだといった．革命思想が広まる条件が社会に存在すること，それを除去すべきこと——これがロリス＝メリコフの主張であり，アバーザの主張でもあったはずなのに，ここでは革命家と公衆，民衆とが完全に異質なものとして分離されている．この反駁は無意味なものであった．

マーコフの原則的否定論に対してアバーザは諮問機関としての性格を強調している．

「もしもこれが専制を制限せんとの傾向をもつのであれば，いかなる時にもまして現在専制が必要なのだから，われわれの中にはこの方策を提案し，支持するものはいない．」（強調—和田）

ミリューチンの議論も，アバーザのこの議論も純血の専制護持派の主張に対して改革派の主張がもつ宿命的な論理の弱さを示している．改革派はどうしても専制の制限は悪であると認めるところから論理を出発させざるをえず，その主張を仮装し，擬装しなければならなかった．だから専制の制限だと攻撃されれば，そうでないという甲斐なき弁明を強いられ，論争は防禦戦に追い込まれざるをえないのである．

アバーザのあとに立ったロリス＝メリコフの発言はその改革派論理の弱さをカバーする切札を出している．彼はまず反対意見には自分に対する非難がこめられているが，皇帝の生命を守るために自分としては最善を尽した積りだ，3月1日以後辞意を表明したのに新帝に慰留されたのだと述べた．彼は開き直ったのである．皇帝は「たしかにあなたができうることをすべてなしたということは承知している」と認めざるをえなかった．

ロリス＝メリコフは彼の政策路線を改めて説明し，次のように結んだ．

「今ならば提案されている措置で完全に公衆を満足させ，落ち着かすことができます．しかし，われわれがぐずぐずしていれば，機会をのがし，3カ月もすれば，実際きわめてつつましい現在のわれわれの提案ではすでに手おくれになることは九分通り確実であります．」（強調―和田）

これがロリス＝メリコフの切札であり，全改革派の保守派に対する切札であった．反体制運動が一層激化するというこの展望こそロリス＝メリコフの権力の源泉であった．そしてこの展望を前面に出して，彼は改革案の実現をはかってきた．いま彼はその展望で反対派を圧伏せんとした．それは現実的なものとしてきいただろうか．ヴァルーエフがこの切札について「何という取るに足らない反駁しか彼にはできないのだろう！[1]」と書いているのはすこぶる示唆的であり，予言的である．

改革派の論者が一わたり出たところで宗務院総監ポベドノスツェフが立った．「麻のごとく青ざめ，興奮の色の明らかな」彼は大演説を行なった．彼は「私は困惑というよりは絶望しております．かってポーランドの最後の近いころ“Finis Poloniae！”が語られたように，現在吾ても“Finis Russiae！”といわざるをえないのではありますまいか」とはじめた．この草案は「虚偽で息づいている」，「心臓もちぢむ思いがする」と彼はいった．何故か．

「法案をよりよく作成するために国民生活を知る人々を招くことが必要だ，専門家の意見をきく必要があるというふうにわれわれには説明がされます．もしそれだけのことをしようとするものであれば，私はすこしも反対しません．専門家はかっても呼ばれたことがありますが，それはいま提案されているふうにではありませんでした．ちがうのです！これはロシアに憲法をもちこもうとしている，一挙にではなくとも，少なくともそのための第一歩を踏み出そうとしているのです．」

ポベドノスツェフはロリス＝メリコフの意図をほぼ完全に見抜いた．彼は「虚偽」の存在を語る．偽装せる立憲主義――彼はこの改革案の思想を読み取った．

憲法は「あらゆる不真実の道具」であり，「あらゆる陰謀の具」である，代表たちは「国民の意見の真の代表者」たりえない――こう彼がいうと，皇帝が賛意を表した．

「ロシアは専制のゆえに，国民とそのツァーリとの間の無限の相互信頼と緊密なつながりのゆえに強力でありました．……いわゆるゼムストヴォの代表たちはただツァーリを国民から引き離すだけです．一方，政府は国民について配慮し，その現実の必要を認識し，国民がしばしば出口のないような窮状からのがれるのを助けてやらなければなりません．……これこそ新治世の任務であります．」

専制を推持し，強化し，しかるのちに国民生活に配慮せよ――これが彼の主張であった．そして，この体制になじまないものは，「おしゃべり部屋 говорильня」として把握される．ゼムストヴォ，都市自治体もしかり，新裁判機関もしかり，新聞雑誌もしかり．この上「新たに最高のおしゃべり部屋を外国の手本によってつくる」必要があろうか．殺された皇帝の遺骸がいまだ葬られざる現在，大事なのは仕事だ．「行動せねばなりません」――こうポベドノスツェフはその長口舌を閉じた．

この演説は改革派を慄然とさせた．ミリューチンはいう．

「ポベドノスツェフの演説は……曖昧なスラヴ主義理論の反映であるように思われた．これはヨーロッパ文明の基礎をなす一切のものの否定であった．われわれの多くはこの狂信的な反動のいくつか

（1） Там же. стр. . 153.

の言葉に神経の戦慄を覚えるのを隠しえなかった[1].」

アバーザが反論に立った．彼はこの演説の本質は前帝の治世に対する「告発状」だとして次のようにいった．

「もしも彼の意見が正しいのであれば，陛下，あなたは過去の——あえて申します——偉大なる治世の改革に参加したわれわれすべてを大臣の職から罷免せねばならないでしょう.」

彼はポベドノスツェフのペシミズムを批判し，改革の途上でみられた好ましからぬ現象は「完全なる停滞から合理的な市民的自由への移行の状態にはいつでもどこでもありうる不可避的といってもよい」現象だとした．国民について配慮すべきだと宗務院総監がいうのは同感で，自分も努力している．しかし，問題は一般国民だけでなく，教養ある諸階層の要求も容れ，「彼らをできるかぎり統治に参加させ，彼らの意見を聞く必要があるのだ.」これは激しい演説であったが，ポベドノスツェフの痛い所をつかなかった．

ついで立ったソリスキーは「落着きはらって」，アバーザとはまったく別の方向から攻撃して，一定の効果を収めた．彼はポベドノスツェフ演説には「皆が同意することが多い」，われわれの間にあるのは「根本的な信条の差異」ではなく，「意見の不一致は主として誤解に基いている」ということから出発した．すなわち誰も「憲法や専制の制限」を考えてはいない．

「要するに，われわれには専制が必要なのであります．しかし，それとともに専制権力が現実の国民の必要を認識し，それに基ずき意識的に行動しうることが必要であります.」

「実務的な人々の参加をえて重要立法措置を検討することの利益」をポベドノスツェフも否定していない．「まさにわれわれによって提案されたのはそのことである.」細部では意見は分れるが，それはまた検討すればよい．「問題は根本思想で，それについては……見解の差はない.」

ここまで後退して，ソリスキーはポベドノスツェフを攻撃した．

「氏はすべてを批判したが，自分ではなにも提案されませんでした．……結びでコンスタンチン・ペトロヴィッチは現在のような時は行動が必要であると正しくもいわれた．われわれに提起されているのは行動計画であります．それがよくなければ，別のそのと取り代えなければなりません．しかしただ批判だけに留まって，行動しないでいること——これは不可能であります.」

この攻撃はポベドノスツェフの急所をついたものであった．しかし，それをするために，意識的にであれ，無意識にであれ，改革派は自らの提案を無に等しいものとして表現せざるをえなかったのである．

しかし，改革案を葬ろうとした皇帝とポベドノスツェフの側でも勝利を握る切札はなかった．運輸大臣ポシエット К. Н. Посьет が反対したあとに立った官僚的中間派ウルーソフ公爵が「こんども水もそそぎ，鋭い問題提起を和げる[2]」役を買って出た．彼は「政治的な措置ではなく，実務的に有益な措置として」賛成するが，方法は大臣委員会で再検討せよと提案した．文相サブーロフ，法相ナボコフが原案に賛成したあと，オリデンブルクスキー公もウルーソフ提案を支持した．国有財産相リーヴェン公爵 A. A.

(1) Милютин, т. 4. стр. 35.
(2) Там же. т. 4. стр. 36.

Ливен が曖昧ながら原案に反対したあと，コンスタンチン大公も1866年の国家評議会改造案の提案者としてロリス＝メリコフ提案の根本思想に賛成であるといい，ソリスキーの反駁を繰り返えし，結局はウルーソフ提案に同調した．ミハイル大公は意見を保留し，ヴラヂーミル大公はウルーソフ提案に賛成した．

結局，皇帝を除く出席者22名中，発言者17名，無条件の支持はソリスキーも入れて6名，曖昧な支持がヴァルーエフ1名，大筋は賛成だが再検討せよというウルーソフ提案支持が4名，無条件の反対は4名，曖昧な反対がリーヴェン1名，保留1名であった[1]．

さすがに改革派は強力であった．保守派はウルーソフ提案で事態を収拾することを得策とした．ストロガーノフが大臣委員会での再検討に反対しないといい出した．ここでウルーソフはさらに保守派に媚びて，最初は皇帝任命の小委員会で検討したらと提案した．皇帝はその機をとらえた．

「そうすることに対する障害はなにもない．私の意図はかくも重要な問題が安易に決定されるのではなく，できるかぎり根本的に全面的に検討されるようにするという点にある．」

そしてその委員会の議長のポストをストロガーノフに提案した．その意図は明白であった．ストロガーノフ主宰の委員会がこの改革案を葬ることは確実であった．しかし，ストロガーノフは辞退した．皇帝は重ねて，委員として加わることを求め，「私はあなたがこの件に参加することを特に望んでいるのだ」と述べた．そして，メンバーは午刻決めることとして，皇帝は閉会を宣し，4時45分，2時間半の会議は終わった．

この会議についてゴリーツィンは，皇帝の意見はポベドノスツェフの線にすでにあったが，彼はこの会議では「意識的に」，「巧みに自分の真の態度を隠した，そのため会議では「いかなる決定もなされなかった」と述べている．そして皇帝がそういう態度を取った理由を「革命勢力の新たな出撃」があるかもしれず，旧帝から引きついだ大臣たちの代りに「彼と心の同じ協力者」を集めることが必要であることからくる「帝位についた彼の力の弱さの意識」に求めている[2]．われわれはこれに反対である．以上みてきた経過よりすれば，皇帝が改革案を葬るべくいかに意図的に議事運営をしたか明らかだからである．席上明らかにされた改革派の強力にして，保守派の弱体なることが皇帝が自らの意図を押し切るのをはばんだ．動揺はまさにそのことからふたたびはじまるのである．すでにストロガーノフの議長就任を求めて，うまく呼吸合わず，断わられてしまった皇帝は会議後にヴラヂーミル大公を議長にするということをロリス＝メリコフにいわなければならないような気分になっているのである[3]．

したがって，われわれは「ロリス＝メリコフの草案の運命は実質的には3月8日の会議であらかじめ決せられた[4]」という意見にも反対する．もしも皇帝の意志に注目して

（1） 出席者の賛否についてはいろいろ取沙汰されてきた．もっとも新しいヘイフェッツは出席者15名中，賛成8，反対5，中間的な立場2とするが，不可解である．Хейфец, указ. соч. стр. 199.

（2） Голицын, указ. соч. стр. 139-141.

（3） Перетц, стр. 47. 噂としては Валуев, стр. 155. Милютин, т. 4. стр. 37.

（4） Готье, указ. соч. стр. 270.

草案の運命をいうのであれば，それは3月8日ではなく，少くとも3月6日に求めなければならないだろう．

問題は，ロリス＝メリコフの改革案に対する強い疑惑をもちながらも，会議の失敗でふたたび動揺をはじめた皇帝にいまだ明確化するに至っていなかった3月1日を契機とする国内政治情勢の変化がいかなる印象を与えるかにかかっているのである．その条件が未知数で改革案の再検討が一応約束される以上，改革案はなお可能性をのこしていた．

第4章　改革案の清算

1

3月8日会議のあと，その日のうちに書かれた二通の書簡がある．一通はマーコフからポベドノスツェフへ，他の一通は彼からロリス＝メリコフへである．ここには会議の後反ロリス＝メリコフ派の心中にいかなる感情が動いたかが見られる．

マーコフはポベドノスツェフ演説について，そこに見られた「注目すべき誠実さ」，「市民的勇気」に敬意を表するが，「一瞬の興奮に限度を忘れ」「極端に走ること」が欠陥だと忠告している．そしていう．

「私は非妥協的な敵を得たことを知っています．このことはコンスタンチン大公がすでに廊下で私に言明したところです．私が提案された措置は専制権力の制限の第一歩であるといったのは犯罪であるかのように彼はいいました．……私は何事も恐れません．……今日は良心の命ずるところにしたがって，臣民の義務を果たしたものとの確信をもち続けています[1]．」

ここに見られるのはロリス＝メリコフ派の力に対する不安である．

ポベドノスツェフの書簡も興味深い．

「尊敬するミハイル・タリエロヴィッチ伯爵　今朝の興奮であなたと一言も話すことができませんでした．しかし，私が今日の会議で述べた言葉があなたの心に私に対する個人的な不満の感情を残したとすれば，私は大変悲しい．……意見と見解は異なることもありましょう．しかし，今のような時は各人の義務は自らの良心と理性を精一杯働かせて語ることです[2]．」

この手紙について，ゴリーツィンは「自分の節度のなさに対する自然な立腹の感情[3]」といい，ゴーチエは「筆者に特徴的な」「偽りの温和な調子[4]」という．ゴーチエの方が正しい．聖王ルイを崇拝し，敬神の心あつき宗務院総監は政治家としてはマキャベリストであった[5]．マーコフの書簡の不安は彼の感情でもあった．ロリス＝メリコフ派は簡単には追い出せない．そこで彼は相手に混乱を与え，こちらの動きをカムフラージュするために奇妙な親愛の情をこめた書簡を送ったのである．

手紙を受け取るロリス＝メリコフの側では会議の経過はどのように受け取られたか．

---

(1) Novum Regnum. № 123, стр. 160-162.
(2) Материалы, № 10. стр. 180
(3) Голицын, указ. соч. стр. 140.
(4) Готье, указ. соч. стр. 272.
(5) Cf. Byrnes, op. cit. p. 121.

翌9日ロリス＝メリコフに会ったペレトツは「ロリスは昨日の会議の成り行きにきわめて不満であった」と書いている．これは当然である．即決主義で試みた彼の賭は失敗に終ったのである．しかし，この評価はペレトツの評価とは異なった．ペレトツによれば「結果は大変よく，目的はほとんど達せられた」のであった[1]．彼自身の日記を読んだわれわれにはとてもそうは考えられない．おそるべき記憶力と貧弱な思考力がこの官僚の頭には混在しているようである．

ミリューチンはどうか．彼は書いている．

「このような結末はわれわれを驚したあの雷のようなポベドノスツェフ演説のあとのものとしてはわれわれをかなり安心させるものであった．それにもかかわらず，会議室から出た時，われわれはおしひしがれた気分と神経のいら立ちを覚えた[2]」

コンスタンチン大公はペレトツによると「会議の結果に満足した[3]」といわれるが，大公の日記によれば，そうではない．9日彼はアバーザと話し合ったが，「情勢は容易ではない．……しかし，いずれにせよ，埋葬がすむまでは何もすまい．急がずに待とう」と書いている[4]．

3月15日はその皇帝の埋葬の日であった．翌日ロリス＝メリコフはミリューチンを訪れて事態についての意見を交換し合った．8日の会議はロリスを従来一般的支持を求めるにとどまったミリューチンに強く結びつけた．彼は「ポベドノスツェフのまわりに形成されつつある反動党のおよぼす重大な危険」について語り，ポベドノスツェフのまわりに「新しい流れをうまく泳ぎたい連中がつきまとっている」とした．ポベドノスツェフは「教師としての権威を濫用し」，次々に皇帝のもとに覚書をおくっている．しかし，「皇帝はいままでのところ，いろいろな方向からの示唆に控え目な態度を取っていて，さしあたり，ロリス＝メリコフには信任を示し続けている．」

これは決して希望的観測ではなかった．皇帝は明らかにまた動揺をはじめたのである．二人の結論はこうだった．

「二人ともいましばらく待期の状態にいよう．そのうち二つの対立する道のうちどちらが皇帝によって選ばれるかがわかる．ポベドノスツェフの一派の党が勝を制すれば，私もロリス＝メリコフも辞職する．」他にも仲間が多勢やめるだろう．「どういう人々が彼らのポストを占めるのか？その綱領は何か？国民性と正教のマスクをかぶった反動だ！[5]．」

アバーザはどうか．彼はこの日ペレトツに語っている．

「ロリスの株は上がり，ポベドノスツェフはまったく影響力がない．……われわれは思う存分意見を述べ，公然たる闘争をやる義務を負っている．なぜなら大臣のポストにあるからだ[6]．」

政治的感覚の甘い男の言葉を同じように甘い男が伝えているのだから，相乗されているということもあろうが，これはまた超楽観主義である．この日の夕刻郵政省が廃され，マーコフは解任された．ペレトツはこれをアバーザの評価の証明と考えた[7]．しかし，ミリューチンによればこれは，マーコフに対する皇帝の個人的悪感情の故であっ

(1) Перетц, стр. 47.
(2) Милютин, т. 4. стр. 37
(3) Перетц, стр. 46.
(4) «Красный архив», т. 8, 1925, стр. 152.
(5) Милютин, т. 4. стр. 40.
(6),(7) Перетц, стр. 51.

て[1]，ロリス＝メリコフの力とは無関係である．

この期に行なわれたその他の人事も混乱した印象を与えた．3月20日にはコンスタンチン大公の退陣，国家評議会議長の後任にミハイル大公就任が本決まりになった．これは新帝と大公の不和から早晩行なわれることが予想されていたものであった．ついで24日には文相にサブーロフの代りに，ニコライ男爵 А. П. Николаи，国有財産相にリーヴェンの代りにイグナチエフが任ぜられた．ニコライは18年前に文部次官を勤めた老人で，自らの表現によれば「伝統の保守的分子」であった[2]．イグナチエフは先の駐トルコ大使で，スラヴ主義思想の持主であり，彼がポベドノスツェフに接近していることはロリス＝メリコフの知るところであった[3]．

ペレトツやヴァルーエフは一連の大臣更迭をロリス＝メリコフの力によるものとした[4]が，そのことを問題にする必要ない．真相がそうではないことは当のロリス＝メリコフにはわかっていた．ただ彼が20日にミリューチンに伝えているように，「皇帝は彼とポベドノスツェフを折り合わせようと説得をしたこと」，文相に極右派のデリャーノフ И. Д. Делянов を任ずる考えをもらして，彼が反対するとそれを引っこめたこと[5]が問題であった．皇帝はポベドノスツェフに力を入れているが，自分の意見もきく——これがロリス＝メリコフを当惑させ，また若干の希望を与えた．

ロリス＝メリコフを当惑させた皇帝の態度が戦術的なものではなく，皇帝の動揺を表わしているのだということは，この態度がポベドノスツェフをも当惑させていることで知られる．3月24日付の彼のチュチェヴァあて書簡には次のようにある．

「陛下は私に対して信任と好意を示している．……20日に彼は私に手紙をよこし，文相のポストの件で，ニコライ男爵と話し合いをはじめてくれるように求めた．それから23日には皇帝はニコライ男を自分のところへよばれ，事は落着した．……今日は陛下はイグナチエフ伯をよばれた．彼を……国有財産相に任ぜられたときく，この話は私には思いがけなかった．私は他の任命を思い描いていた．……ロリス＝メリコフ伯をどうするのか．彼があぶないとして，その後任に誰が予定されているのかこれは問題だが，……私は全然知らない．彼が居すわって立場を強化することもありうると思うと恐怖を覚える[6]．」

彼はイグナチエフをロリスの後任に考えていたのである．皇帝の態度は彼にも不可解であり，彼は不安に襲われている．

このような皇帝の動揺の基礎は何か．それは3月1日以後の政治情勢の変化がなお明確化しないためであったといえる．われわれは次にその情勢の変化がツァーリ政府の認識にどのように反映してくるかを見よう．

2

3月8日の会議で，ロリス＝メリコフは3カ月先にはこんな「つつましい」案ではす

（1） Милютчн, т. 4. стр. 41.
（2） ポベドノスツェフのアルヒーフ中にある彼の書簡を見よ．Novum Regnum. № 118. стр. 156-158.
（3） Милютин, т. 4. стр. 40.
（4） Перетц, стр. 54. Валуев, стр. 157-158.
（5） Милютин, т. 4, стр. 43-44.
（6） цит. Готье, указ. соч, стр. 275

なくなるという切札を投げた．問題の核心は，権力にとって定かにはわからぬ混沌とした情勢の新しい展開がその予言を裏書きするかどうかにあった．

すでに見たように権力者の恐れていた皇帝殺害を契機とする民衆騒擾はおらないことはペテルブルクについては3月1日に知られていた．全国的にもそうであったことを3月27日ロリス＝メリコフが各県知事にあてた秘密回状は確認している．

「悲しむべき3月1日事件は全ロシアを恐怖のどんぞこにたたきこんだ．しかし，ロシアを見舞ったこの打撃によっても他の国ならどこでも必らずおこったと思われる騒擾はおこらなかった[1]．」

では，いわゆる「教養ある人々」，「公衆」はどうであったか．ロリス＝メリコフは3月12日ペテルブルクの自由主義的な日刊紙「声 Голос」の事実上の主筆ビリバーソフを招いて，3月8日会議招集前の皇帝との接触，会議の経過を話してきかせた[2]．会議の経過については，発言の順序も，発言の内容も，会議の結末もことごとく事実に反している．これは何を意味するか．非公開の秘密会議の内容をもらしたとあっては，問題になれば責任は大きい．話全体を仮空のことにしておけばいざという時，あんな事実無根の話をするはずがないと逃げられるのである．だから話全体を仮空のことにして，その話を通じていくつかの真実を伝えんとした．すなわち政府部内に改革案が存在し，それが審議されたこと，それに反対したのがポベドノスツェフ以下の5名であることである．この話を自由主義的ジャーナリストの大物に伝えることによって，ロリス＝メリコフはそれが公衆を元気づけ，その運動を活発化させることを期待したのである．

ツァーリ政府部内の改革派に期待をかけられた自由主義運動はその期待を裏切ることになった．見るかぎり政府部内に一定の反能をよびおこした「公衆」内の動きは四つ挙げることができる．

第1は新聞論調である．これについてポベドノスツェフは3月3日にチュチェヴァにあてて「新聞はいとわしい．彼らは憲法を要求するこの新たな機会を喜んでいる[3]」と書いているが，明らかに嫌悪をかき立てはしても恐怖を与えるほどのキャンペーンでなかったことが知られる．

第2は3月23日のペテルブルクのスラヴ委員会でのアクサーコフ演説であった．彼はその中で次のようにいった．「われわれは奈落の淵にきた．これまで犯罪的に軽率にもわれわれが進んできた方向へもう一歩踏み出せば，血まみれのカオスあるのみだ．」この責任の一端は西欧自由主義に惹かれた公衆にもある．「今こそ引き返えす時だ Пора домой．」「専制なるツァーリをいただき地方自治する民 земля——これがロシア人の政治理想である[4]．」

ヴァルーエフが「愛国主義の道化[5]」と評した反動化したスラヴ主義の声に皇帝は共感した．3月25日アクサーコフの妻で宮中女官のチュチェヴァ（ポベドノスツェフの文通者の姉妹）А. Ф. Тютчева (Аксакова) は皇帝との対話を日記に書き留めている．皇

（1） Материалы. № 14, стр. 185-185.
（2） Совет министров 8 марта 1881 года. Рассказ графа Лорис-Меликова В. А. Бильбасову. «Былое», 1918, № 4/5, стр, 187-193.
（3） цит. Готье, указ. соч. стр. 259.
（4） Самодержавие и земство. стр. 120
（5） Валуев, стр. 157.

帝はいった.

「私は最近のあなたの夫の論文をすべて読んでいる. 私がそれに満足していると彼に言ってほしい. ……彼は誠実で, 真実を愛する人間だ. とくに大事なのは生粋のロシア人であることだ.」「私はあなたの夫の述べる考えに共鳴する.」「この会議 (=3月23日のスラブ委員会) について報告を受けている. 出席したイグナチエフから聞いて詳細に知っている.[1]」

第3は皇帝殺害犯人の大赦を要求する哲学者ソロヴィヨフ В. Соловьев の公開講演である. これより先文豪トルストイ Л. Н. Толстой は同一趣旨の書簡をポベドノスツェフに送り, 皇帝への取次ぎを求めた[2]. ポベドノスツェフは当然ながら, これを握りつぶした.「慈悲の宗教を認める人民の代表たるツァーリは彼らを許すべきであり, 許さねばなりません[3]」と述べて満場の喝采を浴びたソロヴィヨフの場合は, 改革派のミリューチンによっても「現下の情勢下では狂気の沙汰[4]」と評されたが, ポベドノスツェフとストロガーノフを激昂させた. ポベドノスツェフは3月30日皇帝に書簡を送り,「否, 否, 断じて否です. ……この瞬間すべての人は復讐を渇望しています」と書いた. 皇帝は, 心配するな,「6名の殺害者はかならず処刑される」と答えた[5]. この動きもそれだけのことであった.

第4は「保守的自由主義者」, モスクワ大学教授チチェーリン Б. Н. Чичерин の提案である. 彼は3月10日に「新治世の任務」という長文の覚書を草して, ポベドノスツェフへ送ったが, その中で現状のカオスの悪の原因を「改造事業のなしとげられた早さ」に求め,「焦眉の課題は社会主義との闘争である」として, その対策を次のように述べている.

「ロシア政府は自分の力だけでそのような闘争を行なうことができるか? できない. このためには全国民の道徳的支持が必要とされる. それはあらゆる意味を失なった公式の陳情書では与えられず, 民の代表 представители земли との生々した交渉のみがかな与えうるものである.」

そして, 具体的には彼は貴族とゼムストヴォの代表を国家評議会に加えることを提案した[6]. チチェーリンのその後の書簡からしてポベドノスツェフが反対したのは明らかである[7]. この動きもそれだけの孤立した行為にとどまった.

総じて, 政府の目よりすれば,「公衆」の動きは鈍く, 自由主義運動が燃え上るきざしはどこにも見られなかった.

学生の間ではモスクワ大学における花環事件が注意を惹いた. 死んだ皇帝に捧げる花環の募金をした大学生が3月6日学生集会で非難され, 学生の自治活動での投票権を奪われた事件である[8]. ポベドノスツェフは皇帝に書簡を送り, この件には副総長ムーロムツェフが関係していると嘘をつき,「サブーロフとミリューチンの両大臣によって許

(1) А. Тютчева, При дворе двух императоров. вып. II. М. 1928. цит. Готье, указ. соч. стр. 249.
(2) Novum Regnum. № 136. стр. 171.
(3) И. И. Попов, Минувшее и пережитое. Л. 1928. стр. 75-78.
(4) Милютин, т. 4. стр. 50
(5) Novum Regnum. № 24. стр. 47-48.
(6) Там же. № 101. стр. 104-120.
(7) Там же. № 102. стр. 120-121.
(8) История Москвы. т. IV. М. 1954. стр. 381.

可された学生集会の結果はこの通りに現われました」と書いた．皇帝はこれに対し，「これが本当にそうなら，許しがたき醜態で，これを放置することは不可能である．」と答えている[1]．このことはサブーロフ罷免の直接的契機かもしれない．

しかし，権力者の見るかぎり真におそるべき闘争は存在しなかった．問題はひとえに無気味な革命党にあったのである．

3月24日になっても，ペテルブルク市内では騎兵隊によって非常線が張られ[2]，皇帝はアニチコフ宮を一歩も出なかった．「出て歩けば，一歩，一歩が危険だといわれている」とポベドノスツェフは書いている[3]．

3月26日～28日の3日間最高法院特別法廷で開かれた皇帝殺害者6名の裁判は新たな波紋を投じた．被告たちはその才能，人格，エネルギーで出席した政府高官を圧倒したミリューチンは書いている．「ジェリャーボフ А. И. Желябов は際立っている．これは傑出した人物だ[4]．」ペレトツは書いている．「ペロフスカヤ С. И. Перовская はきちんと身づくろいした小柄なブロンドの小娘だが，非凡な意志の強さと他の人々に対する影響力をもっているのに違いない[5]．」そして冷静なミリューチンが次のような気分に襲われる．

「聞いた一切のことから次のように結論できる．われわれの前の被告席にすわっているのは偶然……捕えられた五人のもので，多かれ少なかれツァーリ殺害の犯罪に関係しているが，決して3月1日のカタストロフの主犯ではないと．ジェリャーボフやペロフスカヤ以外にも……革命運動ではるかに重要な意義さえもつ人々が他に多勢いることは疑いない．そしてすべて彼らは自由の身で，相変わらず人に知られず，このペテルブルクで行動を続けているのだ[6]．」

革命運動の恐怖は権力者の意識の上ではいまだ去っていなかったわけである．

しかし，やがて，革命運動の実態が政府にもキャッチされる．4月9日に至って，ミリューチンはロリス＝メリコフから次のようにきいた．最近逮捕された連中の「調書によれば，ジェリャーボフとその仲間の演説には多くの自慢と誇張があり，この党，いわゆる≪テロリスト党≫は決してメンバーが多くもなく，資金が潤沢でもなく，その力はひとえに，その若干の指導者の性格とエネルギーにのみ帰着することが明らかとなった．」

だが，とロリス＝メリコフはいった．「国家の未来にとってより重要なのは革命党に賛成する層が日々ふえているということである[7]．」日々ふえているかどうかは疑わしいとしても，革命党を支えた人民の不満が消えることはないのは事実である．しかし，革命運動が清算される時，国内の政治的緊張が解ける時，専制の制限の志向をもつ政治制度改革を実現せんとする政府部内の改革派が専制護持派を抑える切札は失われるのである．かくして，この時より，ロリス＝メリコフの改革案実現の可能性は完全に失わ

(1) Конституция графа Лорис-Меликова...стр. 52-53.
(2) Валуев, стр. 157.
(3) цит. Готье, указ. соч. стр. 275.
(4) Милютин, т. 4. стр. 48.
(5) Перетц, стр. 54.
(6) Милютин, т. 4. стр. 48.
(7) Там же. т. 4. стр. 54.

れ，ロリス＝メリコフらの失脚は時間の問題となった．

3

革命党壊滅の真実が明らかとなったこの4月9日の対話で，ロリス＝メリコフとミリューチンが辞職の問題を真剣に論じたのは故なきことではない．「未来に彼はかなり暗い見通しを持っていた．その点私は彼と完全に一致した[1]．」とミリューチンは書いている．

混乱と動揺のインテルメッツォを終らす契機となったのは皇帝の言葉であった．このころ皇帝はロリス＝メリコフに向かい，「将来の政府のプログラムを確立する……ために，特別会議をやがて開くことにしたらよかろう[2]」と述べた．その意図は必しも定ではない．しかし，ロリス＝メリコフはこの機会をとらえて，事態をはっきりさせることに腹をきめた．

4月12日彼は来たるべき特別会議のために意見を述べたいとして皇帝のもとに覚書を送った．この覚書は二つの部分に分れている[3]．第一部では「政府活動の課題」として十項目の懸案が列挙されている．いずれも従来の彼の覚書に見えていたものである．第二部は「政府の直面する課題の実行のための必要条件」と題されていて二つの条件が挙げられている．

第一の条件は「政府と国内政策のプログラムの統一」である．

「何よりもまず単一の，内部的に一致した政府をつくる必要があります．大臣たちは重要な問題では相互に話し合って，大臣一人一人にとって無条件に義務的な国内政策の共通なプログラムを確立せねばなりません．」

もとよりそのプログラムの選択は皇帝の自由であるが，それを拒む時は大臣をみな更迭せねばならない．つまり，皇帝に責任を有する内閣をつくれという主張である．これは皇帝にポベドノスツェフをとるのが，ロリス＝メリコフをとるのが，迫まる意味をもっている．

第2の条件は「改革の事前の作成と実行に公衆の代表を加えること」である．ここでは彼の提案の原則だけが繰り返され，形態論は一切落されている．

この覚書には淡々とした卒直な調子があって，以前のものといちじるしく異なっている．最後の解答を待つ人の諦めであろうか．

この覚書を受けた皇帝は4月21日ガッチナにおいて特別会議を催すことを決め，出席者をヴラヂーミル大公，イグナチェフ，ニコライ，ポベドノスツェフ，アバーザ，ミリューチン，ナボコフ，ロリス＝メリコフと指定した．

会議の前の両派の気分はどうか．ポベドノスツェフは相変らず皇帝の心がつかめないのに悩んでいた．4月17日彼はチュチェヴァに「事態はありうべからざるものである」と書いた．21日の会議については，「私はこの会議に光と明確な解決を期待しない．しかし，それでも今よりはもう少しはっきりした線が出るだろう[4]」と述べている．

(1) Милютин, т. 4. стр. 54.
(2) 12日の覚書中に述べられている．
(3) Материалы, № 12, стр. 180-184.
(4) цит. Готье, указ. соч. стр. 275-276

一方，前日の20日は集まったロリス，アバーザ，ミリューチンの三人の気分も沈みがちであった．「ロリス＝メリコフはひどく幻滅していて，何もよいものはないと予想していた」．楽天的なアバーザは一番元気であった．

「この先何を予期しうるのか……はっきりさせるために問題を直ちに純粋に提起する方がよいというのが三人の結論であった[1]．」

4月21日，七人の大臣は文字通り異越同舟，同じ汽車で皇帝のいるガッチナへ向った．会議は「現在いかなる方策を，これからのためのいかなるプログラムをとるべきか」について大臣たちの意見を聞きたいという皇帝の発言ではじまった[2]．ロリス＝メリコフが最初に立って，「前帝の治世にはじめられた改革を引き続き発展させ，完成させることが必要である」との意見を述べた．ついでミリューチンがロリスの話を受けて，「最近14年間の停滞と反動の中で警察的な厳格さは反逆を抑えることができなかったばかりか，逆に不満な人々を大量につくり出した」と述べた．

次のイグナチェフも同一趣旨の発言をした．それからアバーザが立って，「政府の現実の力は『拳』や警察の専横にあるのではなく，大臣の統一と団結，その行動プランの強固なること，近しい助言者とその機関への皇帝の信頼にある」といって，ホベドノスツェフの名を挙げて非難した．文相ニコライの発言は「かなり長く，退屈な」話ではあったが，組織だった行動が必要だとする内容であった．またナボコフも裁判制度の改革を主張した．

「かくて発言した六人の大臣はすべてほとんど同一趣旨の意見を述べたのである．」発言の最後はホベドノスツェフであった．ミリューチンは次のように書いている．

「驚ろいたことに彼は忘れがたい3月8日会議の時とはうって変わった言葉で話しはじめた．彼は国家体制の一層の改善が必要であるという他のすべての人が述べた意見に賛意を評するところからはじめたのである．」

このことは何もホベドノスツェフが皆の主張に屈服したことを意味しない．彼はのちにチェチェヴァに自分の発言を説明している．

「私は統一，信頼，多くの混乱しているものをきちんと組織することの必要性などについて他の連中が言ったことのすべてに一般的な意味では同意しないわけにはいかないと述べた……キリスト教の原理は永遠である．しかして，それを実現するのは限りがない．この意味で内部改革は決して止む時がない[3]．」

原則論で闘うというその原則の選び方に改革派は失敗したのである．しかし，アバーザはホベドノスツェフが降伏したものと思い，「抽象的・理論的アフォリズムは無益である」と高飛車にきめつけた．

議論の中で，今日のような皇帝臨席の大臣たちの特別会議を開くことの話などが出たが，ミリューチンのいう「まったく思いがけなく現われた意見の一致」が議論の展開を阻止してしまった．「ほんの時たま他人の演説に断片的な言葉をはさむだけで」，発言を控えていた皇帝は「大臣たちが必要に応じて，望まれる行動の一致を達成するために——

(1) Милютин. т. 4. стр. 56-57.
(2) 経過は以下による．Там же. т. 4. стр. 57-59.
(3) цит. Голицын, указ. соч. стр. 145.

般的国家的な問題で予備的な会合をもつことを望む」といって，会議を閉じた．

暗い気持でいたロリス＝メリコフ派はこの会議の成行に喜んでしまった．ミリューチンは「予想したよりは成功」とし，この会議が「若い皇帝の思想傾向によい影響を与えると期待してよい」と書いている．ロリス＝メリコフの気持は定かではなかいが，ミリューチンの評価とさして遠くなかったろう．最後で彼は彼の「ミトロファーヌシカ」にしてやられたのである．アバーザは熱狂した．

「アバーザは成功と自分の演説は有頂天であった．彼はポベドノスツェフの生命は失なわれたものとみた．なぜなら，彼は自分の覚え書きを直接皇帝のところへ出すのではなく，会議に提出しなければならないだろうが，この会議では彼の意見は容れられないだろうからである．……要するに，アバーザはロリスと彼の完勝がやってきたものとみている[1]．」

この超楽観主義には楽観主義者のペレツですら疑問の言葉をはさみたしなったのも無理はない．しかし，アバーザは取り合わなかった．

ポベドノスツェフの反能は微妙である．彼も必しも皇帝の心がわかっているわけではない．しかし，彼は皇帝に「現在の時点で人々の頭を静めるために，陛下のお名前で，国民にいかなる曖昧さも残さない毅然とした声明」を，すなわち，専制の護持の宣言を出すことを勧める決心を固めた[2]．そこへ皇帝の書簡が舞い込んだ．

「今日のわれわれの会議は私に悲しい印象を与えた．ロリス，ミリューチン，それにアバーザは積極的に同じ政策を続け，われわれをあの手，この手で代議制政府にまで至らしめようとしている．しかし，私がロシアの幸福にとってこれが必要だと信じないうちは，もちろん，こんなことはありえない．……とはいえ，いつかそのような方策の利益を信じるようになるということもなかろう．私はあまりにもその害を信じている．……ますますこれらの大臣から善を期待しえないことを確信する．……このような大臣と関係をもつのは困難で，つらいことだ[3]．」

ポベドノスツェフは勇躍して，23日マニフェスト公布を勧める書簡を皇帝のもとに送った．それを第一信として，4月25日に第二信が，4月26日に第三信とマニフェストの草案が送られた．第三信には次のようにある．

「全ロシアがこのようなマニフェストを待っており，有頂天になってこれを受けいれるでしょう．もちろん憲法を待望している犯罪者たちは別です．ストロガーノフ伯はまったく文面に満足しています．彼以外誰もこのことは知りません．……

もしも陛下にしてロシアにとって破滅的な犯人たちの制度を許容せぬとの堅きご意志が真実おありにならば，そのご意志を全国民に声明するのをどうか躊躇なさいますな．……文面について大臣たちと相談される必要はありません[4]．」

今となって皇帝がこのことを決意するのには考えることはなかった．この日の夜の12時，彼はガッチナから電報を打った．

「文案を完全に承認する．詳しく相談したい．明日2時においで乞う．アレクサンドル[5]．」

（1） Перетц, стр. 65.

（2） 彼のアルヒーフ中にある3月21日の会議云々という書簡草稿は4月21日付の彼の皇帝あて書簡の下書である．その草稿と書簡との比較から彼の感情の動きが知られる．Novum Regnum. № 23-24, стр. 46-47.

（3） Novum Regnum. № 27. стр. 49.

（4） цит. Готье, указ. соч. стр. 288.

（5） Novum Regnum. № 29. стр. 50.

明けて4月27日国家評議会で買戻義務制と買戻金減額の問題をめぐってアバーザが反対者と渡り合っていた[1]頃，ガッチナではポベドノスツェフと皇帝が会っていた．

「皇帝は大変満足して，何度か読み返えした．……彼らにどんなに不意打を食わすことになるかと思うと皇帝は気持ちがよいようであった[2]．」

4月28日夜，21日の会議でいわれた大臣たちの会合がロリス＝メリコフ宅で行なわれた．議題は四つあった[3]が，ゼムストヴォ問題で激論になった．農民救済策の立案にゼムストヴォ代表を加えるという点では，ポベドノスツェフ一人を除いて，他の者の意見が一致した[4]．ヴラヂーミルの妥協的提案で散会したのは夜の一時であった．

その時になってはじめてマニフェストの話が出た．ここは簡潔なポベドノスツェフのメモに語らせよう．

「外へ出た時，ナボコフがマニフェストのニュースを告げ，読み上げた．憤激の爆発．アバーザはわれを忘れて叫んだ．とめねばならぬ．皇帝がわれわれと結んだ契約にこの違反を犯かすのを中止するように要求せねばならぬ．

そこでロリス＝メリコフが彼をとどめた．

するとアバーサは興奮して言った．誰がこのマニフェストを書いたのか？

私は進み出て言った．「私だ．」

ドラマチックな瞬間．私は急いで去った[5]．」

皮肉なユーモアである．しかし，こうなれば，ロリス＝メリコフ派にとって答えは明らかだった．ミリューチンは書いている．

「ロリス＝メリコフ伯とアバーザは強い表現で憤激を述べ，大臣として留まれないと単的に語った．私は彼らの意見に賛成した[6]．」

4月29日，マニフェストが公布された．

「その測り難き定めにおいて，神は，朕の愛する父の栄光の治世を受難の死によって閉じ，朕に専制統治の聖なる義務を課すことをよみせられた．（中略）

皇帝のためとあれど生命をも惜まぬ忠良なる民のただ中にて賤しき悪人により果されたるロシア皇帝の卑劣なる悪しき殺害はロシアに未だ聞かざる恐るべき，恥ずべき事件にして，悲嘆と恐怖によりわが国の光を奪った．

しかし，われらが大いなる悲嘆の真中にあって，神の御声は朕が統治の業において，おおしく，神の御業を頼りとし，専制権力の力強く，真理なることへの確信に満ちて，в вере в силу и истину садержавнои власти 立つことを命じ給うた．国民の幸のために，あらゆる秘められたる意図と闘い，専制権力を確立し，守ることこそ朕の使命である．（中略）

大いなる勤めに献身する朕は朕が忠良なる臣民すべてに以下のごとく訴える．ロシアの地を辱しめたる厭わしき反逆を根絶し，信仰と道徳を確立し，子供らに善き教育を与え，不正義と略奪を一掃し恵み深く，愛される朕が父によりてロシアに与えられし諸制度の運用にあたって秩序と正義を定立すべく，信と義をもって朕と国家に奉仕せよ[7]．」

（1） Милютин, т. 4. стр. 60-61.
（2） цит. Готье, указ. соч. стр. 290.
（3） 議題の通知状は Novum Regnum. № 30. стр. 50.
（4） Милютин, т. 4. стр. 61-62.
（5） Novum Regnum. № 31. стр. 51.
（6） Милютин, т. 4. стр. 63.
（7） Novum Regnum. № 32. стр. 51-52.

あらゆる政治制度改革の企図を斥けて，専制を不動のものとして維持するという宣言である．かくして，ロリス＝メリコフの改革案の否定はここに公的に宣せられた．

この日，ロリス＝メリコフは健康状態が職務遂行に堪えないという理由で辞職を願い内相の職を免ぜられた[1]．アバーザとミュリーチンがそのあとを追う．

あ と が き

以上がロリス＝メリコフの政治制度改革の企図の準備にはじまって清算に終わる過程である．この過程追求の意図は19世紀80年代以降20世紀初頭のロシアの国家権力の性格の分析に一つの資料を与えることであった．はなはだ分析の貧しい本稿ではあるがツァーリズム権力の政策決定の機構と過程，ツァーリの役割ツァーリズム政治家の行動様式などについて一定のイメージを与えることはできたように思う．

もとより，ロリスーメリコフの改革企図が流産に終わったというこの事実，いいかえればこののちもツァーリズムが従来通り無制限君主制として存在することになったというこの事実が近代ロシア社会の発展にとってもつところの歴史的意義を明らかにするには，いまだ多くの問題が解かれねばならない．われわれはここで本稿の対象から直接導かれる二つの問題を提示しておこう．

その一は，ツアーリズム政治家の用いる言葉そのままにわれわれの使ってきた「穏健な人々」，「公衆」とは何か，何を求めたのかを問うことである．この時点でそれはいかなる社会階層よりなり，その要求にはいかなる階級的利害が反映していたのだろうか．例えば，いわゆるゼムストヴォの自由主義とはいかなる歴史的性格のものなのか．また「ゼムストヴォ」紙による自由主義者，アクサーコフらのスラヴ主義者の運動の舞台であるモスクワの市会の多数派をなす商工業ブルジョワジーはこの時点でいかなる要求をもち，これらの諸勢力に対していかなる態度を示したのか．

総じて，「穏健な人々」，「公衆」の構成と要求を知ることによって，ツァーリズムが彼らの要求とくに政治参与の要求を拒否したということが歴史のコンテキストの中でもつ意味をネガチヴに追求することができるだろう．

その二は，ロリス＝メリコフの改革企図を可能にした国内政治情勢の尖鋭化の基盤をなす社会的矛盾を80年代のツァーリズムがどう処理したかを問うことである．その処理の方法はどの階級の利益に合致するのであったろうか．これはポジチヴなアプローチをなすことになる．

それらは今後に残される課題である．おそらくそれはきわめて困難な作業となるであろう．そのような研究は国際的にも少いからである．

ともあれ，ロリス＝メリコフの改革企図の過程を追求した本稿を閉じるにあたって，われわれは次の事実を提示しておくことにしよう．

1888年12月12日，失意と憤激の書簡を友に書きつらねていたロリス＝メリコフは南仏ニースの療養地で死んだ．この時までに彼が政治制度の改革によって解決すべき問題としてあげたもののうち，一時的義務負担関係の清算，買戻金の減額，人類税の廃止は

(1) Переписка, № 53-54. стр. 127-128.

ツァーリ政府の手で実現されていた．それを行なったのは彼の抜擢した大蔵次官で，彼とアバーザの辞職後，蔵相となったブンゲである．そして，当のアバーザ，彼のもっとも緊密な協力者であったアバーザも，すでに4年前，国家評議会経済部会議長の職に返り咲いていたのである．

（本稿は1960年10月28日のスラヴ研究室研究員会議で行なった報告の草稿を改稿したものである）

ПРОЕКТ ПРЕОБРАЗОВАНИЯ ЛОРИС - МЕЛИКОВА И ЦАРИЗМ

ХАРУКИ ВАДА

Проблема так называемой "констиуции Лорис-Меликова" издавна обращала к себе внимание историков, но, как анализ этой проблемы на основе первостепенных источников, имеются только две: статья Н. В. Голицына ("Былое", 1918, № 4/5) и статья Ю. В. Готье ("Исторические записки", т. 2). Однако, и в этих статьях не дан всесторонний анализ попытки преобразования Лорис-Меликова с приготовления проекта до его ликвидации. Автор попытается исследовать лорис-меликовскую попытку, как процесс, в целом.

Во главе I автор анализует личность Лорис-Меликова и его отношения к другим членам царского правительства. Лорис-Меликов — не только убежденный либерал, утверждающий конституционное начало, но и умный политик, имеющий силу и такт преследовать свою политическую цель. Общепризнанную неопределенность и двухсмысленность его действий и слов считает автор его тактикой. Став начальником Верховной распорядительной комиссии, Лорис не приближался к громкому "красному" великому князю Константину и К°, а добивался скорее доверия консервативного цесаревича Александра. Потом, пользующаясь оказанным цесаревичем доверием, Лорис ввел свои единомышленников в правительство и так усиливал свое положение на власти.

Во главе II автор анализует процесс приготовления проекта и также содержание и логику составленного проекта. Лорис узнал от впечатлений, произведенных на царя и цесаревича его докладом 2 апреля, что они относятся к преобразованию политического строя так отрицательно, что они только допускают привлечение "сведующих и благонамеренных людей" к разработке вопросов, касающихся местных нужд. В виду этого, он при помощи А. А. Абаза и М. С. Каханова составил проект учреждения временных совещательных комиссий, в котором он соединил "общую комиссию" в составе выборных представителей от земств и крупнейших городов с "подготовительными комиссиями", организованными на уже утвержденном царем начале привлечения "сведующих людей". Сделав ряд важных предварительных работ, как например организацию сенаторских ревизий, он представил проект преобразования в январе 1881 г., впервые цесаревичу, потом царю. Его помысел состоялся в том, что, начиная с осуществлением этого проекта,

он пойдет дальше вперед на более значительное преобразование по направлению к конституции.

Во главе III автор анализует процесс обсужления проекта. Цесаревич и царь опасались этого проекта. Александр II положительно видел в проекте шаг к конституции. Но Лорису удалось убедить их в безопасности и неизбежности этої преобразования. Царь утвердил окончательно проект, когда он надписал "Исполнить" над журналом особого совещания министров, одобрившего проект. Однако, Александр II был убит народовольцами в тот же день, когда он одобрил проект сообщения о преобразовании и повелел созывать совет министров через три дня для окончательного утверждения проекта сообщения. Консервативная группа с К. П. Победоносцевым во главе, тогда впервые узнав о приготовленном преобразовании, начала действовать на нового царя, который, хотя до сих пор оказав поддержку Лорису, теперь заколебал в связи с смертью отца. Сторонникам самодержавия удалось подорвать доверие царя к Лорису, и совет министров 8 марта кончил с царским повелением, чтобы проект был пересмотрен с начала.

Во главе IV автор анализует процесс ликвидации проекта. После совета министров вновь начал колебать Александр III. Возможность осуществления проекта еще осталась.

Она зависела от того, что внутренняя политическая ситуация поеле I марта окажется еще критическим или нет.

Однако, погибель бывшей наиболее страшным организации народовольцев стала ясным правительству к средине апреля.

Наконец, влияние Победононосцева взяло верх. 29 ацреля был опубликован манифест об утверждении и охране семодержавия.